

『おくのほそ道』紀行私記

— 敦賀から大垣まで —

横山邦治

一

○露通も此みなとまで出むかひて、みの、国へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より来り合、越人も馬をとばせて如行が家に入集る。前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、

伊勢の迂宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ（岩波文庫本『おくのほそ道』以下引用文同じ）

右の文章は、『おくのほそ道』の結びの部分である。山中温泉で、長途の旅の労苦を共にしてきた曾良と別れた芭蕉は、以後敦賀までの一人旅の道筋をもこまごまと書き続けている。そして、敦賀に着いても、氣比神宮夜参の感懐から西行の歌を追慕して、ますほの小貝ひろはん”と種ヶ浜へ舟で出かけたことまで、微細に記している。

ところが、越前の国敦賀から近江の国を経て美濃の国大垣に至った三ヶ国にわたる長途の道筋については、『駒にたすけられて』の

一筆書きで終る。まことに素気ないという外はない描写で、この間の消息については説のあるところである。私なりに諸説をまとめれば、『按ずるに、此一章は一篇の終なる故に文勢をのづから健にして迫る。是亦和漢文章の一格にして、翁の筆鋒の間然すべからざるを知るべし』（『奥細道管孤抄』）の評を必然とするにふさわしい結びの文たらしめるには、簡にして要を得た文でなくてはならなかった。そして芭蕉の念頭にあった『おくのほそ道』の旅は、『奥羽を中央にして、関東と北陸が前後に配されているといった構成』（『詳考奥の細道』阿部喜三男）であってみれば、一応敦賀で終っていてもいいものであった。それを大垣まで記したのは、『おくのほそ道』が大垣をもって結びとしたのは、どういう構想なのであろうか。芭蕉は、これから伊勢へ行こうとしている。伊勢まで行ってしまつては、もはや『おくのほそ道』旅行とはいえない。では、敦賀で止めるべきであったか。敦賀で止めるには、何か締めくくりになるべきことがなければならぬ。敦賀は、芭蕉にとってはまだ旅の最中であつた。安心して頼るべき門人もいない。大垣に来て初めて、親しい門人たちに取り囲まれ、芭蕉はほっとした安心感を抱いたのである。ここまで来れば故郷も近い。頼りにできる門人も多い。ここ

で、『おくのほそ道』の旅は終わったのだと、芭蕉は実感をもって感じ取ったであろう。『奥の細道をたどる』井本農一』というのでもあったろう。当然のこと、途次の風物は黙殺し去ってもいいことになろうし、また曾良本に『をはやめて』を消して『にたすけられて』と改めている、これを芭蕉の推敲の跡を示すものとするれば、元来芭蕉は門人たちの待ち受ける大垣に一刻も早く着きたいとの気持があり、千載一遇の伊勢迂宮の実景を一見しようとの素志からもその気持は強まるばかりという、芭蕉の心の在り様が当初ここに反映したとしてよからうか。『にたすけられて』と改稿したのは、『前途三千里のおもひ胸にふさが』っていた芭蕉が、やっとその長途の旅を終えて疲れ果てた身体を駒に託した、その思いをより一層明確に浮き彫りする語句として後から採りあげたのではあるまいか。いずれにしても、敦賀から大垣への旅の途次には、芭蕉にとって心惹かれる風物も歌枕もなかったのであり、恐らく路通を通して『蘇生のものにあふがごとく』の想いで待ちこがれる美濃の門人たちの心を知ったであろう芭蕉は、彼自身の帰心矢の如き思いを表現するためにも、『駒にたすけられて』の一筆書きで終らざるを得なかったのであろう。

必然的に、芭蕉が路通ともども駒を乗り継ぎながら歩いたであろう道順は、『おくのほそ道』の読者には不明のまま残された課題となる、詮索好きの興ある対象となってくるのである。

二

一般的にあって、当代の敦賀から大垣までの道順は、大凡三―四

の在り様が想定されるようである。従前の諸説を整理しながら、私見を示す。

①基本的には、曾良の道順が参考になる。山中温泉で曾良と別れた芭蕉の足跡は、種ヶ浜の本隆寺に行くところまで先行した曾良の行程と一致して、両者の間に事前の打ち合わせがあったごとくでさえあるからである。『曾良随行日記』によると、八月十日の條、
『夜前、出船前、出雲や彌市良へ尋。隣也。金子壹兩、翁へ可渡之旨申頼、預置也。』とあり、また八月十一日の條、『天や五良右衛門尋テ、翁へ手紙認、預置。』とある、二人の異った人に金子と手紙を預けたというのであるが、こうしたところにも、両者の打ち合わせの緊密さがうかがえる（用心のため二分したとも考えられるが）。当然、敦賀以降の旅程も、ある程度 of 了解が成立していたと考えてよからう。

さて、曾良の敦賀以降の旅程は次のようである。敦賀↓木之本（十一夜泊）↓長浜（便船利用）↓彦根↓平田↓鳥居本（十二夜泊）（多賀社参詣のため多賀鳥居本間往復）↓摺針峠↓関ヶ原（十三日夜泊）↓野上（垂井から南宮参詣のため右折して中山道をそれている。）↓大垣（南宮から大垣への道筋は、『スグ道ヲ経テ』とあって不明。『スグ道』というのは、間道を指すごとくでもある。）この旅程でいえば、多賀と南宮への参詣が脇道で、その他は、当代の敦賀から大垣への一つの道順を示しているといえよう。すなわち、敦賀から北国街道の本陣を有する大きな宿場木之本へ出て、北国街道を南下して長浜、ここから舟便で彦根城下へ出て中山道を垂井まで、ここから美濃路を大垣へという道順である。ここで、敦賀から木之本への道順について、『最短距離の塩

津街道をたどっていることを示す”（『おくのほそ道全講』松尾靖秋）との説あり、果していかな。この敦賀と木之本の間の道順については後述する。

②注釈的なものとして、敦賀―大垣間の経路について、“〔通解〕敦賀より近江路をへて大垣の庄に入る。「大藪・新研究」敦賀から大垣まで約二十里。敦賀から琵琶湖の北塩津に出て舟路を利用したのであろう。”（『詳考奥の細道』阿部喜三男）とあるはそれとして、本格的にこの経路にふれたものは、井本農一氏の『奥の細道をたどる』が最初であろうか。“北国街道は、周知のとおり、敦賀から木之本へ出て、琵琶湖畔の長浜を通り、矢倉へ出る。そこから東へ中仙道に出て磨針峠を越え、牛打、柏原を過ぎ、関が原へかかって大垣へ出る道も可能である。しかし、それではずっと廻り道になるので、北陸から美濃へ出るには、北国脇往還が用いられたという。三角形の底辺を行く道が、北国街道のほかにあったのである。すなわち、敦賀から来るとすれば、木の下までは北国街道だが、それから本街道とは別れて、道をやや東へとり、佐野・今庄・小田・春照・清水・寺林と伊吹山下を通り藤古川を越えて、美濃の国の玉に入り、関が原を通って大垣へ出るのだという。”とあるのがそれである。これで、木之本からの北国脇往還説は定着した観があつて、麻生磯次『奥の細道講読』、松尾靖秋『おくのほそ道全講』でも同説を採用している。頼原退蔵説（芭蕉研究三）によれば、天明六年の白崎琴路の「蕉翁宿句帳」に「路通もこゝにむかへまいらせ、杖を湖東に曳て別れ出たまひぬ」との文あり、この「湖東」というのを、柳瀬から木之本に至る湖北に対して北国脇往還の街道を指すとすれば、芭蕉以後の近

世人の一般的感覚を示すものとしていいのではあるまいか。とすれば、井本説の補強材料としてよからうか。

ところで、敦賀から木之本の間について、井本氏は「北国街道」といわれるが、敦賀は北国街道と縁はない。同書付図12を見ると、余呉湖の南を通って木之本へ出る道が示されており、松尾氏のいわれる塩津街道を経ているごとくである。また、越前と近江の国境辺の道順のカーブの有り様は、新道野を経る塩津街道のそれを示しているごとくである。とすれば、塩津街道を経て木之本へ、木之本から北国脇往還を通つて関ヶ原へ、そして中山道・美濃路を経て大垣へとの一つの道順があり得たことが確定する。

③さて、敦賀より木之本までの道順であるけれど、井本氏は北国街道を経てと説かれながら付図で塩津街道らしきを示され、松尾氏は曾良の道順の説明としてはあるが、塩津街道を近道として説を立てておられる。一方、麻生氏は、「芭蕉も敦賀から足田・刀根・柳瀬・中之郷と同じ道を歩いてやはり木之本に一泊したことであろう。」（『奥の細道講読』）と説く。井本氏の敦賀から北国街道を木之本へといわれるのも、この道順を指しておられるかとも思われるが果していかがか。ところで、現在の実情は、敦賀から足田までは一筋の道、麻生口で道は二つに別れる。現在の国道八号線を進めば、旧塩津街道を縫いながら琵琶湖北端の塩津浜へ出、琵琶湖畔の佳景を眺めて南下、やがて賤ヶ岳下の長大な賤ヶ岳トンネルを抜けて木之本へ着く。一方、麻生口から左して刀根部落を通り、旧柳瀬線（古くは北陸本線、現在の北陸本線開通後は柳瀬線として存続、現在では廃線）の柳瀬トンネルを国鉄バスで通れば、北国街道の宿場である柳瀬へ出、そして北国街道を経

て木之本へという順路がある。敦賀から木之本へと一口にいても、現に二つの順路があり得たのである。現在では、旧塩津街道を経て木之本というのが最も便利な道順なのであるが（北陸高速道が完成すれば、瞬時にして事情は一変するが、元来塩津街道は、東北・北陸の産物を敦賀から塩津浜まで陸送し、塩津浜からは舟便で琵琶湖南岸の大津などに運送、やがて京阪の大消費地へという産業の大動脈として幕初に発達した街道で、舟便を利用してこそ上方への近道といえるのであるが、陸路で木之本へということになれば、賤ヶ岳を主峰とする連山を横断するという難路（現在の地図（五万分の一）を検するに、賤ヶ岳トンネル以外に全く道を見出せない。賤ヶ岳の連峰を越えるという山路しかなかったのではとも考えられる。）を通らねばならず、大垣への「近道」というには程遠いものであったと思われる。塩津浜へ出て舟便を利用すれば、上方への「近道」というべきであつたらう。当然のこと、（大藪・新研究）に説く「塩津に出て舟路を利用した」という経路を通る時は、塩津街道を経て舟便で彦根にでも行き、中山道を通って大垣へという道順が考えられるということになる。が、木之本という宿場に固執すれば、敦賀から北国街道の柳瀬に出て木之本へ、そして次の行程へというように考えなくてはならないであらう。

以上のように、敦賀から大垣への道は、組み合わせると、四様にも五様にも極めて多様であるが、一応、この辺の事情に明るい路通に案内された芭蕉の旅したのは、敦賀から柳瀬へ出て木之本へ、そこから北国脇往還を関ヶ原へ出、そこから中山道を垂井ま

で、垂井から美濃路を大垣までというのが、一番あり得る経路のようであった。

以下は、その道程を確認するまでの報告である。

三

昭和五十二年八月十八日の正午過ぎ、かねて約定の北陸は敦賀の駅頭に集合したのは、元禄は二年、芭蕉が『おくのほそ道』の旅に発った年令（時に四十六才であった）とほぼ見合う、とは言え詩神に憑かれた脱俗の芭蕉の在り様とは裏腹に生活に倦み疲れた中年の教師と、前途洋々若さで勝負の女子学生数名、前途三千里のおもひ、とは誇張表現としても、東北・北陸を巡歴する旅に比すれば、ほんの前途二十里ばかりの道程に、日々の足の患いはという思いを馳せて「泪をそぐぐ」ばかりの風情ながら、「耳にふれていまだめに見ぬさかひ」を見定めんと決意にて、まずは喧騒の上なしという在り様である。さらに『おくのほそ道』をなぞれば、「只身すがらにと出立侍を、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさがりがたき餞などしたるは、さすがに打捨がたくて路次の煩」となれるこそわりなけれ」と、言うも恥かしい重裝備、重そうなりエックサククにつば広帽子、登山用ソックスにキャラバンシューズという身なりで、まずは敦賀駅頭から第一歩を踏み出すこととなったのである。

①敦賀・種ヶ浜

敦賀から大垣への行脚の跡を追う前に、敦賀での芭蕉の足跡をと、まず敦賀駅頭から氣比神宮へ向う。駅前の大通りを直進するこ

と二・三町、T字型に交わる道を右して更に数町、右前方に氣比神宮の大鳥居が見える。この間の町並みは、今出来の新旧様々の建物が不統一に櫛比しており、西鶴の『日本永代蔵』巻四の四に見える「殊更秋は立つく市の借屋目前の京の町男まじりの女尋常に其形氣北国の都ぞかし」という風物の再現を期待する者には、終戦直前の敦賀大空襲をうらむ外はない。昔日の豪商の俤を残す建物など「さあ、どうですか」と、物識り顔の町家のご主人も首を振る有様である。氣比神宮も空襲で焼失、その後の有様は、井本氏の『奥の細道をたどる』に見られるごとくである。今は、近時再建されたとおぼしき華麗な本殿を拝することができけれど、「社頭神さびて」などという風情を感得することは不可能である。兎宮や角鹿神社の古木に、いかほどか「松の木の間きあひに月のもり入る」という情趣をうかがえようか。芭蕉が感銘深かつたらしい「遊行ゆぎようの砂持すなもち」の説話も、神饌所の中年の奥さんに神札を求めながら尋ねても、一向に要領を得ない。神饌所の右隅の神垣にかくれて、破れた布袋から白砂のこぼれ出た残骸が積み重ねてあったから、「古例今にたえず」なのであろう、由来を語り聞かせてくれる在地の衆を持たない一行にとつては、芭蕉的感銘はなかなか得がたいのである。ともあれ、前途廿里の「交通安全」を祈願して、金ヶ崎に向う。

今の金ヶ崎町、金ヶ崎宮あって南北朝時代の古戦場であるが、鐘が崎の沈鐘伝説（「此海に釣鐘のしづみて侍る人義貞敗戦の時陣鐘を沈むという」を、国の守の海士を入れてたづねさせ給へど、龍頭のさかさまに落入て、引あぐべき便なし云々『俳諧四幅対』に、芭蕉が感じて、月いづこ鐘は沈るうみのそこ

の句を残したという真言宗の金前寺を探す。相応の古寺であろうと懸念に探したが見付からない。あれこれ探索した結果、小さな本堂はあるけれど民家に毛の生えた程度の金前寺を探しあて、庭先にある沈鐘の句碑を拝する。宝暦十一年十月建立の句碑は、戦火に焼かれてもいて碑面の文字は判読できない。親切な金前寺住職豊島弘尚師が、自家製のパンフレットを配って説明して下さる。今は、その一部を引用しよう。「句碑は芭蕉死後六十八年目に建立され、古くから芭蕉の真蹟を刻んだものと伝えられる。芭蕉は元禄二年八月十四日夕、等裁の敦賀とんがに入り、唐人橋の出雲屋弥市郎方に泊り、夕食後、氣比神宮に参拝、翌十五日雨の中を天屋玄流らに案内されて、金前寺を訪れたと云う。金前寺は真言宗、本山は高野山金剛峰寺、四十五代聖武天皇の天平八年（七三六）天皇の霊夢により勅を奉じ、泰澄大師が十一面観音の坐像を本尊として寺を建て、天皇親筆による金光明経を賜り、その経により金ヶ崎、及び金前寺と称されるようになった。弘仁二年弘法大師が留錫あり、氣比神宮の奥の院として、伽藍十二坊を有し、本尊袴掛観音は、縁結びの観音として靈驗あらたかであった。この金前寺こそ、延元に入るや、北国の鎮護として下向し給うた皇太子恒良親王及び尊良親王を迎え奉って、氣比社の祠官氣比氏治以下いくた忠勇義烈の士が、賊軍を引きうけて、一大血戦の本営となつたのであった。以后、寛文二年（一六六二）安孫子浄泉氏が観音堂を再建、鎮護国家濟世利人の祈願所として法灯相続せしも、昭和二十年七月十二日夜、米空軍による爆撃により堂宇一切を焼失、灰塵と化した。

月や月無祿の寺を守りゆかん 金前寺住 豊島弘尚略記」というのである。この由緒ある古寺が、再び昔日の輪奐の美をよみがえら

せる日のあらんことを念じて、金前寺を辞す。

金ヶ崎から西して、海岸沿いの倉庫や人家の間を縫って、種ヶ浜の渡航船の出る港に向う。東北や北海道の産物を上方へ送る中継港として栄えた敦賀の港、その近世の盛時をしのばせる風物いかんと露路もうかがうのだけれど、一向にその面影を見出せないまま、笹の川の分流の堀割、その河口の小さな港に着く。二十人乗りぐらいの小さな蒸気船で、まず常宮へと向う。

常宮神社は、氣比神宮の摂社として社格の高いお宮で、国宝の新羅鐘（豊太閤の命により若狭藩主大谷刑部奉納）を蔵し、宮本官司が芭蕉の沈鐘の句の真筆短冊を蔵されているとのことと訪れる。敦賀湾に面した神社で、古色が各処にうかがえる。新羅鐘は拝見できなかったが、官司さんは留守で、短冊は拝見できず、常宮大鳥居前の句碑「月清し遊行のもちし砂の上」を拝見して辞す。芭蕉がここに立ち寄ったかどうか不明だが、曾良は種ヶ浜の帰路、便船で立ち寄っている。曾良の日記には「巳刻、便船有テ、上宮趣、二リ。コレヨリツルガヘモ二里。ナン所。」とある。曾良は、種ヶ浜へ便船で行った記事の中にも「クガハナン所」とわざわざ注記しているけれど、今は敦賀から種ヶ浜まで広い道がつくられ、バスも通っている。で、常宮から種ヶ浜まで歩こうの声は、「二リ」の声におどされてかき消され、結局バスに乗って行くこととなる。

海の見渡せるやや高所のバス停、今様のレジャー施設ある場所から海浜へ下りていく。コンクリート造りの簡単な船の発着所のある港を中心に、松の古木が点在する中に十数軒の民家がある。漁師の集落という風情だが、民宿の旅館も多く、夏場は敦賀市民の憩いの場となるようである。その集落のほぼ中央に、本隆寺がある。本隆

寺は、現在民宿も兼ねるが、当日は蟹族で満員とのこと、隣家のあさひ旅館に宿を取る。庭先に「小萩ちれますほの小貝小盃 桃青」の句碑のある本隆寺に参詣、蟹族でごたごたしている玄関で住職に来意を告げると、気軽に本堂に入れて下さり「其日のあらまし等裁に筆をとらせて寺に残す」「おくのほそ道」という等裁の真蹟も見せて下さる。この真蹟の来歴は、井本農一氏『奥の細道をたどる』など諸書に詳しいので省略する、この本堂は、井本氏らが参詣されたころより後に再建されたものらしく、本格的なものである。が、元来狭い寺域一杯に建てられているので、私ども一向宗安芸門徒の念頭にあるお寺とはイメージを異にする。山門ももちろんなく、言ってみれば集会所とでもいう風情、寺伝によれば「本隆寺は、もと金泉寺といって、曹洞宗永厳寺（敦賀）の末寺であったが、応永三十三年八月、法華宗に改宗して現在に至っている。改宗の理由は、尼ヶ崎本興寺の日隆大聖人が、生国越中よりの帰途、南条郡河野浦より敦賀に来る途中、風波に遇って色ヶ浜に上陸した。当時、色ヶ浜は村中疫病が流行して苦しんでいた。これを見た日隆大聖人は大慈大悲の御意を以て、海辺の一大石（祈禱石）の上に坐して御祈禱遊ばされた。これが為に疫病は退散して、村民の病は悉く平癒した。不思議の御利益を蒙り、村民一同は聖人に帰依して、それより金泉寺を改宗して本隆寺とした。聖人を第一祖と仰ぎ、當時の住職義承は二祖となる」という、事の真偽は問わず、この本隆寺が、海浜数戸の漁民の信仰に支えられたお寺であることが判る。芭蕉が、西行の「汐染むるますほの小貝ひろふとて色の濱とはいふにやあるらむ」（『山家集』）という歌にひかれて、「ますほの小貝ひろはん」と「海 上七里」（実際は三里半ばかり、敦賀市は指呼

の間にある、芭蕉の誇大表現か、往復の距離を指すのか。を舟で種ヶ浜に着いた時、芭蕉の目に映じたのは、濱はわづかなる海士の小家にて、佗しき法花寺あり」というのであった。貧しい漁村の信仰に支えられたお寺であつてみれば、蘆葺き屋根の「佗しき」御堂が、貧弱な漁師の「小家」にまじつてある態のものであつたらう。堂守の、恐らく善意あふれる住職の心遣いで、「茶を飲酒をあためて」ささやかな海辺の酒宴と洒落たのであろうが、すべて「破籠・小竹筒などこまやかにしたゝめさせ」ている持参品であつた。巨松の枝を鳴らす秋風は、芭蕉をして「寂しさや須磨にかちたる濱の秋」の句を残さざるを得なくさせたのであり、日暮れ（夕日は海岸に迫る裏山に早く沈んで、海に沈む夕日の美なぞ縁がなさそうである。）に明日の糧を求めて漁網をつくろう漁師の姿は、芭蕉をして「夕ぐれのさびしさ感に堪たり」とも感銘させたのであつたらう。

ともあれ、本隆寺の前の通りを左右に並ぶ民家が、今出来の新材で補修してあればあるだけ、崩れかけた「海士の小家」を想い、觀光の蟹族（勿論私どもも含めて）のみ横行すればするだけ、人影まばらであつたらう往時を想い、芭蕉の感懐の追体験のよすがともされる、と一寸一人よがりもしたくなる現況ではある。

夕刻、ますほの小貝を求めて海辺に出る。宿の人は、海辺の細かい砂を掘つて小貝を探してくれる、が不慣れな私どもには夕闇で探すことが出来ない。それほどに、小さな小さな貝で、鮮紅色から薄紫色まで極めて多様である。その小貝の埋もれた砂浜に、風も凩いでいる故為か、音もなくおだやかな波が寄せている。日本海の荒波を予想すると見当違いで、敦賀湾に面した内海といつてもいいので、元来荒波とは縁がないのではあるまいか。芭蕉の「浪の間や小

貝にまじる萩の塵」の句も、このおだやかな海辺の情景の中に入れば素直に解せるようである。多様の解が見られる「浪の間や」の句意も、頼原説（俳句研究12・4）に従つて「浪と浪との間」と解すればよく、その「浪」も「さざ波」とすればよいのである。麻生説の「波が引いて、またうち寄せるその間」というのは、頼原説を亨けて誤解というべく、きらきら輝く波の間に萩の花びらが散つて浮いている実景を想定すればよからうか。もちろん遠浅の浜であつてみれば、水際の浅い波間に小貝がすけて見えるごとくなのである。浪の寄せて返す間という状景を想定するには、あまりにおだやかな海であり、この句の繊細な感覚もそうした状景にそぐわないと思われる。学生たちは、翌朝、浜辺の波間から沢山のますほの小貝を拾つて来ていた。

○金崎城について『太平記』巻第十七「金崎城攻事付野中八郎事」に「彼城ノ有様、三方ハ海ニ依テ岸高ク巖滑也。巽ノ方ニ当レル山一ツ、城ヨリ少シ高フシテ、寄手城中ヲ目ノ下ニ直下ストイヘ共、岸絶地僻ニシテ、近付寄ヌレバ、城郭一片ノ雲ノ上ニ時チ、遠シテ射レバ、其矢萬ノ谷ノ底ニ落ツ。サレバイカナル巧ヲ出シテ攻ル共、切岸ノ辺マデモ可ニ近付ニ様ハ無リケレ共」と描写されて、天然要害の地、ここで馬はもとより「二ノ木戸ノ脇ニ被ニ射殺一伏タル死人ノ股ノ肉ヲ切テ、二十餘人ノ兵共一口ツ、食テ、是ヲ力ニシテ戦ケル」という死闘がくり返された古戦場で、『太平記』巻第十八「金崎城落事」に「都テ城中ニ籠ル処ノ勢ハ百六十人、其中ニ降人ニ成テ助カル者十二人、岩ノ中ニ隠レテ活タル者四人、其外百五十一人ハ一時ニ自害シテ、皆戦場ノ土ト成ニケリ。サレバ今ニ到迄其怨靈共

此所ニ留テ、月曇リ雨暗キ夜ハ、叫喚求食ノ聲嘸々トシテ、人ノ毛孔ヲ寒カラシム。「誓掃三閻奴、不願レ身、五千貂錦、喪三胡塵、可レ憐、無定河邊骨、猶是春閨夢裡人」ト、己亥ノ歳ノ亂ヲ見テ、陳陶ガ作りシ隴西行モ角ヤト被ニ思知タリ。と、その最後の有様を伝える。果して芭蕉が金崎古城趾に足を運んだかどうか、今は不明と言わざるを得ないけれど、充分芭蕉の詩魂を捉え得るところであつた、が、今は沈鐘の句に芭蕉の心を推測する外はない。

② 敦賀―柳瀬

八月十九日、「クガハナン所」という四里ばかりの道をバスで敦賀市へ向う、海岸沿いのくねくね続く山道を通つて気比の松原を過ぎ、やがて敦賀市の中心ともいえる白銀町でバスを降りる。大通りに面する呉服屋のご主人に、旧街道の面影がある所を尋ねてみる、が、小河口あたりまで新しい国道が通つていて何もないとのこと、国道八号線をただ南下することとする。東洋紡績の広大な工場を右に見て、無表情な国道八号線をしばらく南下すると笹の川に平行する、笹の川を右手に鳩原・小河口と進む。小河口あたりから国道の左手に時に小さな集落が見られるので、道傍で幼児のお守をしておられるお婆さんに聞くと、明治にできた旧新道沿いに家が建つており、それから分岐した細道が旧道で一部残つていと話してくれる。自然の地形に沿つて高低ありながら直進する旧道を数十米歩くとまた国道、市橋でまた七十才ばかりのお婆さんに聞くと、国道から外れて右手の笹の川に架る橋を渡つて行くのが、疋田への旧道と教えらる。その旧道をしばらく進むと、疋田の集落に入る。『太平記』の金崎城攻めで荒河參川守が丹後の勢を率いて出発したとき

れる疋壇である。部落の中心のお店で一休みしながら、木之本に出るにはどう行つたらいいかなど聞いたりする、国道に出て八号線を通り直ぐ行く外ないと若い人は答える、昔は刀根から柳瀬へ抜けたが今ではなあとお年寄は答える。疋田城旧跡に登る道を少し過ぎた三叉路に、大きな石の道標が建つている。明治になつてからの建立で、右西京・左東京とある、右すれば、五位川沿いに南下して深坂・駄口・山中・国境・路原・野口・上ノ山・田谷と通つて追坂峠を越え、海津に出て琵琶湖西岸を京に抜ける西近江路となるのである。私も、左の方東京を指して歩く。路傍に古い墓や道祖神らしきがあつて旧街道の面影をしのべないでもない畑中の道や山道をしばらく進むと、また国道と一緒になる。山の中の国道を曾々木あたりまで歩いて左の方を見ると、旧道らしい道が分岐して残つていた新道で、旧道は川向うにあつて、ところどころ断片的に残つているだけと聞かされる。そういえば、くねくね流れている笹の川を真直ぐ突つ切るために、何度か橋を渡つて来ており、笹の川が時に左になりまた右になりしていたことを想起する。旧道はあまり橋を架けずに川沿いくねくね続くのが自然と納得する。峠道は、旧道は急坂でも直進するが、新道は自動車が登り易いようにカーブが多いのと逆の原理である。ともあれ、国道沿いには民家なく、川向うに旧街道に沿うような形でぼつぼつ民家が見える、が、このあたりで旧街道の詮索にも疲れ始める。とにかく、七十才以上の人ではないと、昔の道はさっぱり判らないのである。

刀根へ向う別れ道のある麻生口を過ぎても、なお国道八号線を南下、旧の塩津街道であるが、新道野在の西村弘明氏ご所蔵の『おく

のほそ道』素龍清書本を拝観のための脇道である。愛発（あらち）の小学校前で往生、バスで新道野へ向う。このあたりは旧の敦賀郡愛発村で、愛発の古関のあった場所なのだが、その詮索をする元気を失っている。三里足らず歩いてこの有様、一日でかるがる木之本まで歩いた病身の曾良が、というより、一日十里は歩いたという近世人は誰でも、この有様を見て失笑するであろう。

西村氏宅のある新道野は、塩津街道の分水嶺ともいべき峠の頂上に位置しており、現在は孫兵衛という峠の茶屋的古風な構えのドライブインを経営しておられるが、元来この土地の豪族で、塩津街道を通る交易品の差配を一手に引き受けていた家柄らしい。本宅は大き過ぎて維持困難となり改築したとのことであるが、昔日の威風を伝える庭園が残っており、近世時の栄えた様をしのばせてくれる。素龍清書本の実物を拝見する、古典文学館の複製本で大凡の想像はできたけれど、芭蕉が最後まで身边を離さなかったそのものと思ふと、やはり身のひきしまる思いである。西村氏のお話しに、先代の時にか、田舎者丸出しの老爺が拝観を申し出たので気楽に見せたところ、異常な緊張で本を拝する手がふるえて顔面蒼白、らくにお礼の言葉も出さないで帰っていった、「その人にとって芭蕉は神様だったのでしょね」とのこと。老爺の真摯な態度が、西村氏に深い感銘を与えているようであった。私どもの態度は、どうもその老爺に及ばなかったごとくである。

柳瀬へ出る道は大変だから八号線を木之本へ出なさいという西村氏の忠告を振り切り、麻生口へ逆行して東に向う。笹の川沿いに行く道が、北陸高速道の建設途中で目茶苦茶になっている、旧道など探す意欲も湧かない有様である。ともあれ、刀根の集落の入口、

氣比神宮の分社のあるところまで歩く。そこで、高速道路の工事現場の門衛をしている土地の人にこの辺の事情を聞く。この辺は雪の深いところで、昔の柳瀬線（元来は北陸本線として長浜から敦賀まで通じていたのが、深坂トンネル完通して北陸本線が西に廻ってからは支線となり、戦後過疎赤字線として廃止、その路線を利用して国鉄バスが通っている。）もたびたび立往生、北陸本線が向う側になったのも当然である。柳瀬に行くには国鉄バスを利用するしか方法は無い。柳瀬トンネルは国鉄バスしか利用できず、タクシーも通るのを嫌うし、人は通れないことになっている。峠道は終戦前後まで通る人もいたが、今は危険で通れたものではない。刀根の集落は戦後大火に遭って全戸焼失し、昔の面影を残しているようなものは皆無であるというのである。そして、刀根の南面する山肌は、高速道路の工事で無残に切り崩されている。芭蕉が見たであろう山肌は、人間と自然の営みがより調和しているそれであったらうなど、無用の憤懣を洩らしながらも、それでも止むを得ず回数が少ない国鉄バスを待つ柳瀬トンネルを過ぎ、徒歩のことを思えば一気に中之郷へ、柳瀬の宿場など通り過ぎしたのは、宿が中之郷の民宿みなかみ屋に決っていたからである。

○柳瀬を中心とした朝倉義景と織田信長の決戦の有様を、『朝倉始末記』などによって記す。元龜四年（八月廿八日）天正と改元する、織田信長の大軍に攻撃されている浅井長政の軍を援けるため、八月六日、江州北郡へ進発した朝倉義景の軍は、同八月十日、信長殿大ヅクノ城・丁野ノ城ヲ可被攻ノ由ゾ聞ヘケル。依之、義景ヤナガセヨリ地蔵山へ陣替ヘアリ、ところが、大岳城（江州東浅井郡浅井町と湖北町の境）と丁野城（湖北

町丁野)の両城が陥落して戦意喪失、各談合アリ、「此山ト申ニ、柵ノ一重モ不_レ結、何ヲタヨリニ抱へ候ベキ哉。只今夜ノ中ニ御却候へ」ト申ケル間、同十二日ノ夜、義景地藏山ノ陣ヲゾ引レケル。角テモ、霧直ニ敦賀へ除ル_ノ程ナラバ、苦間敷ヲ、運ノ尽故ニ、又ヤナガセ村ニナミ居テ談合アリ、徹退作戦を協議して、まず足壇まで退くことと決し、義景出立、馬ニ乗玉へバ、右往左往ニサワギ、下人ハ主ヲ捨テ、子ハ親ヲステ、我先ニトゾ退キニケル。此間雨フリタル路ナレバ、坂ハ足モタマラズ、谷ハ深泥ニテ、胄ノ毛モ不_レ見、泥ニ塗レテ足跛、友具足ニ貫テ、蜘蛛ノ子ヲ散ガ如クニシテ、其路五、六里ガ間ニ、馬物具ヲ捨タル事、足ノ踏所モ更ニ無リケリ」という有様となる。一方、信長方は両城攻略後、信長公は聊も休息し玉はず、北国勢が陣取たる田辺山の方を御心にかけて、御覧じ入らせ玉ふ処に、子の刻計に及で、敵の陣取たる山の後より、陣屋々々を焼立る火の色、ほのめきければ、すは敵こそ退け。螺立よと大音声を上、御身をもうでいらでさせ玉ひ、御馬引奇、打乗出給ふに、心懸なる小性五六十騎ぞ続たる。と、信長が陣頭に立ち、揉に揉んで刀根山まで馳付、敵に早ひたくと付せ玉へども、一里先に陣取たる宗徒の人々は、曾て知らざりけり。という有様、小性たる一騎当千の兵共は、大將はさせぬ物にて御座候ぞ。御本陣を、爰にすゑられ可_レ然と申切て、彼是五百騎計付て、其身は真先に進で、頸ばし取な。唯切りふせ撞たふせよ者どもと、下知して、撞伏、切伏せ、乗越、はねこえ進けるに、刀根山峠にて、山崎七郎左衛門尉父子、兼て殿なりければ、五六百騎返し合、暫防戦ふ処に、件の人々撞懸り、暫しが程、相戦ふと云と

も、爰にも足をためさせず追立ける程に、其より敦賀まで追討に、三千余騎ぞ討捕ける。(『信長記』)という大勝、『朝倉始末記』では、『斯_から_りける_る』、信長殿、「敵コソ只今退ト覚ヘタレ、急ギ打出、追懸、討捕ヤ、人々」ト、下知シ玉ヒ、自身馬ヲハヤメ、烟嵐ヲ捲テ押寄ラレ、既ニ、タウ根坂ニテ追著、アトヨリヒタキリニゾ切臥ケル。退者ドモ、敵ニ後ヲ不切ト、路ノアヤウキヲ不云、足壇ヲ指テ引退ク。山崎吉家、「帰セヤ、兵ドモ」ト、馬ノ足ヲ立直々々下知シケレドモ、大勢ノ引立タル事ナレバ、一返モ不返、只我先ニト、山嶮岨ヲイワズ馳_ハ重リケル間、或ハ谷へ墮落サレ、或ハ高岸ヨリ馬ヲ馳倒テ、其尻ウタル者モアリ、只馬物具ヲ拔捨テ、逃_ニ伸トスル者アレドモ、返_カ合戦ハンズル者無リケリ。という有様となり、夜モ明方ニナリヌレバ、吉家・掃部助、同事ニ多勢ノ中へ懸入、十文字ニカケ破リ、巴ノ字ニ追マワシ、四方ヲ払テハ八面ニ当_ラ。追真糝_ラ返シ合、足壇マデノ間ニ、五・六度戦ヒケレバ、勇氣既ニ疲_レハテ、朝倉勢は潰滅する。義景は馬引返テ、軍中ニヲヒテ腹ヲキリテ、尻ヲ戰場ニستن_トと言うが、側近に引き止められ木芽峠を越えて、只五・六騎_ヲで府中から一乗谷へと落ちて行く。足田と柳瀬の間は、この数千名の戦死者のあつた凄惨な戦いの古戦場である。山野を血で染めたであろう痕跡は、現在は全く見受けられない。

①柳瀬と木之本

八月廿日、中之郷の親切な民宿を朝早く発つて柳瀬へ逆戻り。この柳瀬は旧北国街道の宿場の一つであり、幕末まで柳瀬の関所があつたところである。南北に家々の並ぶ柳瀬の宿場は、その東側を新

谷山（標高六六二米）を頂点とする小高い山々が連なり、その麓の部分即ち宿場の裏側に当るところは北陸高速道の建設工事で急速に破壊されており、その西側を中尾山（標高四三九米）の連山があって余呉川が流れているという状況である。工事現場を横切って宿場に入ると、まず郵便局前の立派な門構えの屋敷が目立つ。そしていくらか昔日の面影を伝える萱葺き屋根のまじる民家が街道の両側に立ち並ぶが、その街道の真中を堀割の清水が流れているのが特異な印象を与える。また、東側の民家の間から少し入ったところに萱葺き屋根で風情ある寺院があつて好ましい。まず関所跡をと街道を北へ、宿場の中程の民家の側に最近建てた石碑が関所跡と示しているが、何となく納得しがたくて路傍の人に尋ねると、局長さんがくわしいから聞いてみなさいと教えてくれる。鈴木というお名前の局長さんは、元本陣のご当主、局の前の大きな門構えの屋敷がその本陣で、そのお家へ案内して下さって何かと親切に話して下さる。明治天皇北陸巡幸のご休憩所となつた家で、その巡幸の時刀根と柳瀬間の峠道を千鳥がけに大改修したと聞いているが、その道も今では全く通れなくなっている、それも明治十六年に柳瀬トンネルの難工事が完成して汽車で往き来できるようになってから徐々に廃道となつた。宿場の北の外れに石の道標があり、右をちぜん、左つるがと指示している。北国街道と敦賀道への別れ途であることを示している。関所の跡はどこか明示できないが、幕末に火事で焼失した時再建するように藩から図面が示されており、それによると東西の山麓へ木柵を組んで人が通れないようにして中央にいわゆる関所を構える形で、予想以上に大規模のもの、この関所は殊に出女を厳しく取締つたというが、越前と近江を結ぶ軍略の要衝でもあつたから、北陸の諸大名に

睨みを効かせる上からもこの関を必要としたのであろう。明治維新で関所廃止となつた時、当時の本陣の主人が関所の門構えを本陣の門として移築、現在の門構えがそれである。街道の直中を流れる疏水は昔からで、最近コンクリートで改修されたが、以前は石組みで両岸のところでどこに瓢箪型の石が突出していた。恐らく馬の手綱を結び付けるために設置されていたのであろう。これを瓢箪石と言つた。雪深いところだから除雪用の堀割疏水であつたのであろう。お寺は東側の街道より少し奥まったところに禅宗と東西両本願寺系の寺が三軒、程よい距離をおいて建つていたが、北陸高速道のために三軒とも破壊されてしまふ（立派なお寺が、別のところに移築されていた。）などなど。柳瀬線が廃止されて過疎化が一層顕著となり、今さら跡取り息子に帰るよう強制もできず、樺造りの豪壮な本陣も果して何時まで維持できるかと、由緒ある家柄を示す古系図を見せて下さりながら苦笑される。堀割疏水の改修も寺院の移築も、全て高速道建設の余慶と捉える考え方もあろうが、石組みの川岸がコンクリートに変形し、本堂・庫裡・鐘楼と小じんまりと整つた風情あるたたずまいを見せるお寺が姿を消すというのは、宿場の風情をしのぶということだけに限定せずとも、大変惜しむべきことという感が深いのである。

宿場の南の外れは、例によってL型に曲つた道になっているが、それを過ぎて高速道の工事現場を横切つて東側の山麓に近付くと、また旧街道筋に出る。簡易舗装はしてあるけれど、いかほどか昔の面影を伝えているとおぼしき民家・社寺・水呑場などの街道筋のたたずまいを楽しみながら、小谷・今市・東野を経て中之郷へ。途中、今市から西の方へ外れて余呉川を渡り、新堂の集落の北、行市

山（標高六五九米）連山の一つ林谷山（標高三六八米）の南の山麓の森の中にある毛受兄弟の墓に詣る。毛受兄弟は、賤ヶ岳合戦の時柴田勝家の身代りて戦死した勇士である。中之郷にも、明治天皇の小憩されたお寺があつて、北国街道の宿場なのであるが、余呉湖をひかえて民宿なども多く近代化しており、柳瀬ほどの風情は感じられないようである。

中之郷を過ぎて下余呉に至り、ここで街道を外れて西の方へ向い余呉湖を観光する。余呉湖東岸を南下すれば、賤ヶ岳連峰の小高い大岩山が東方に見える。賤ヶ岳合戦の緒戦で全滅した中川清秀の砦があつたところ、今は中川清秀の記念墓があるというが、詣る元氣なく、また下余呉に逆行し、街道を坂口・穴師と辿って木之本地蔵で著名な長祈山地蔵院浄信寺に至る。坂口の集落で、街道の東側に天満宮の大鳥居があり、真言宗の菅山寺への入口であることを示しているが、山道を半里ばかりと聞いて黙殺して通り過ぎる。やや暑さ負けの気配である。木之本の町は、木之本地蔵の門前町として発達したところで、北国街道においても主要な宿場町であつたようである。

お寺のパンフを要約すると、ご本尊は難波の浦に流れ着かれ、天武天皇に夢告あつて南天竺龍樹菩薩作というので難波に唐隔山金光寺を建立、帝は仏教疎遠の地に安置して衆生済度をと祚蓮上人に有縁の地を求めさせられる。上人は北国街道を下つてこの地の柳の大木の下にご仏体をお休めしたところ動こうとされないで、この土地を木之本と名付け寺号を柳本山金光善寺として伽藍を建立、弘法大師がご仏体を修復、宇多天皇は菅原道真に命じて天下泰平風雨順時の祈願をさせられたところ靈験あらたかつたので長祈山浄信寺

とされた。その後も多くの人の尊信を集めて現在に至っているが、賤ヶ岳合戦で戦火のため全焼、秀頼の命で片桐且元が再建、元文年間宿場の大火のため一字も残さず焼失、以後順次再建、明治天皇が明治十一年北陸巡幸の際一泊されているなど。秘仏を小さなのぞき窓から拝して、徳川中期作庭様式の典型といわれる庭園を行在所のある居間から拝見する。鄙びた味はないが、落着いた雅致ある作庭である。

地藏院の前の道を西へ、国鉄木之本駅を越えて国道八号線を直進し、賤ヶ岳（標高四二二米）の麓の大音にある伊香具大社に詣でる。賤ヶ岳の優美な姿を背景に、古雅で神々しい神域である。再び国道八号線に出て賤ヶ岳トンネルを抜けて、琵琶湖北岸の飯浦に向い、賤ヶ岳の北側の山麓にあるユースに宿泊。

○周知のことだが、賤ヶ岳合戦の概略を『真書太閤記』などに依つて記す。天正十一年三月、北国の雪がとけ初めた頃、越前勢は北近江に出陣して、滝川一益勢や岐阜城の織田信孝との攻防に忙殺されている羽柴勢の背後をうかがう勢いを示す、先遣隊たる佐久間盛政は、鯖波湯の尾今庄板鳥木の目時を打ち越して近江国伊香郡中河内椿市に著けば雪氷まだ解けやらぬ山坂の悪処も更に嫌ひなく北庄より十六里を二日に打って柳が瀬に陣を取り前田孫四郎利長は佐久間に押しならび柳が瀬の東西五十余丁の間だを放火して北国勢の威を示す”といひ、甫庵本には「柴田はいまだ北庄に在と云共、佐久間玄蕃允為三大将二卒三二万余騎、天正十一年二日七日本本辺に至て、出張すべきとの用意なり」略（前田利長ら先陣として木之本へ）——玄蕃大将なれば、跡に打しが、東野之城をおさへ、陣を備へてぞ有ける。前後其勢一万五千、在々所々に分入

て、悉く放火し、凱歌を嘯と上、即勢を打納、柳瀬辺に陣取ぬ。同日、天神川、木本両城におさへの勢をおきつゝ、玄蕃允働きけり。今度も先手は孫四郎いたし候はんとて、一番に打て出けるが、此度は井口川を切て放火せんとの義定なれば、取出之城々におさへの勢あまた所に置て、焼はたらきの勢は、一万騎には過べからず。然共孫四郎若き人なれば深入して、関原近辺まで悉放火し、勝どきを挙引取しなり。"という。この先制の戦で木之本地蔵の伽監も焼けたのであろうか、『信長記』には、朝倉との合戦の一年前、江州北郡へ出陣した織田軍が、余吾木之本辺の谷々在々、一字も不残放火して"との記録あり、『信長公記』には朝倉合戦の時朝倉軍が陣していた地蔵山を焼打ちしたとの記録もあることとて、果して寺伝通り賤ヶ岳合戦の時の焼失かどうか疑問が残る。

いづれにせよ、急報を受けた秀吉は、かねて期したごとく大軍を率いて柳瀬に向けて進発、堀秀政の一手と佐久間軍が今市あたりで前哨戦を行い、その後秀吉は、"賤ヶ嶽木の本の山に附城を築き所々に要害をかまへ柵をふり厳重にそなへて勝家の出陣を押しふ"こととする。この配陣の注進を受けた勝家は、三月十八日、北庄を立ちもみにもんで駆けたて、十九日には柳ヶ瀬のうち中尾山に著陣"する。同日に秀吉は、大岩山と岩崎山に砦を築かせ、大岩山に中川清秀、岩崎山に高山右近を配置、両軍が睨み合いに入ったところで密かに大垣城に退き、岐阜城攻めにかかる。その留守中、四月十九日から廿日にかけて、行市山に陣した佐久間盛政は、"行市山の峰を伝ひ賤が嶽の麓に下り立ち余吾の渚を大岩山へ押し寄せ無二無三に攻め立て"るといふ戦術で中川清秀軍

を攻め、猛将中川清秀を討ち取って同軍を全滅させる。"淡海輿地志略に伊香郡余湖の東岩崎山の南に大岩山あり其山上中川瀬兵衛尉墓あり高さ一丈余そのかたはらに家臣の墓あり天和二年四月廿日百年忌の時木本長祈山浄信寺の住僧雄山の碑銘なり"とある、芭蕉が、『おくのほそ道』の最終行程で木之本を通ったであろう数年前に、中川清秀の石碑は建てられているのであるが、彼の注意を惹いた気配は見られない。

さて、緒戦の勝利を祝しながら、勝家は直ちに自陣に引き返すよう盛政に命ずるが、一挙に勝敗を決しようとはやる盛政は、大言壮語して退かない。一方、島左近は中川清秀の敗死を秀吉に急報する、"島左近が早うちの路次は木の本より小谷へ二里半それより春照野へ四里それより一里半にして関ヶ原又一里半にして樽井又二里半にして大垣なれば都合十三里半なり"という道順で、今いう北国脇往還と同じ、当時から木之本と大垣の間の最短距離となっていたのであろう。

ところで、"四月廿日未刻"に急報を受けた秀吉は、盛政が自陣に引かないでいることを聞いて、"踏々と芝ふみ鳴らし、腰刀を抜いて額に当て、軍さには勝ちたるぞ。おもひの外早かりしぞやと五六度呼はり、馬引けとあり一略一皆々続けとの声の下より、一散に駆け出だし給へば、近習外様の若もの共我も一と跡を慕うて走りけり"という有様、更に、"筑前守殿の大垣を立ち給ひしは未の下刻なり。玉村と藤川との間に至り給ふころ、かの大鹿毛を乗り倒ふし給ふ。この道わづかに五里余に過ぎず。一略一その時日すでに暮れに及びたりけるに、春照野の稱名寺といへる門徒、平日筑前守の願を請けけるが、是の時節御迎へに参らではあ

しかりぬべしとて、菓子を持参し慰め奉り、馬を求め出だして御供申しける。略一又長浜は筑前守久しく在城ありし処なれば、地下人ども年ごろの恩義を忘れず、近隣を催促し松明を幾千万となく、山々峯々をわたりすき間なき迄燈しつれて、大将の御迎へに出で立ちしほどに、大垣街道のあかるきこと白昼の如し。されば是れをたよりとして、酉刻ばかりに大将木の本に馳せ付き、地藏堂の広庭に下り立ちて、暫時休息し給ふほどに、追々にかけ著け二万に近き軍勢、一人も恙なく馳せ集まる」となる。甫庵本には、この間の有様を「癸未 卯月二十日未之刻、秀吉小姓馬廻弓鉄砲、都合其勢一万五千を率し、濃州大柿を立、諸鎧を合せ急ぎ給へる其氣象、いかなる天魔破旬も、向ふべくも見えざりけり」と記す。途次の在り様は「藤川辺にては、はや夕日山のはにちかく、次第に闇く成と等しく、地下人百姓共、手々に松明をともしつれ、御迎の者也と声々に名のり略一長浜近辺之町人百姓等、酒食赤飯馬の飼など持出、一村々々備へをまうけさゞげしかば一略一人馬力を得一きはいかめしやかに其勢甚以夥し」とあり、街道の人たちの協力があって初めて成功した強行軍ということが判る。それにしても、騎馬ではいえず、秀吉は大垣・木之本間を未刻（午後二時）から酉刻（午後六時）という短時間で馳け抜けたわけで、正に神速といふべきであろう。徒歩で急いだ軍兵は、マラソン選手並みである。

かくして、素早く麾下二万余の大軍を賤ヶ岳山麓に集結、意氣大いに上った秀吉方の軍勢は、「夜の明るを待兼一略一只今巳時」（甫庵本）に一斉攻撃を開始する。それより前、賤ヶ岳の砦の守將たる後藤又兵衛の謀略と、坂本城の將たる丹羽長秀の援軍

とよって敗色の見え始めていた越前勢は、猛將佐久間政盛の軍も「二十日夜、節所を窘歩し来たり、昼は終日戦ひ暮したり、目ざす兵知ぬよるのみち、小篠が上の霧もるともにおちまらび、起てはたふれ、倒れてはおき上り」（甫庵本）という有様で、秀吉麾下の大軍に攻めたてられて崩れ去る。この時賤ヶ岳の七本槍三振刀という功名話が生れるのである。一度敗け軍ということが伝わり、皆々浮足立ってしまうもの、勝家の本陣の有様も同じことで、勝家がこの修羅場から脱出する状況を甫庵本に依ってみる。

「柴田小姓馬廻其勢七千余騎、堀久太郎が要害東野を押へ対陣一略一秀吉前夕夜通しに多勢を率し、濃州より至此表一今曉着陣之由、何方共なく沙汰しければ、軍中雜説を云、こゝもかしこも以外さわぎ出、怯弱なる者共は、多く頓疾虚病に事よせ、夜の間は落しも有。悉く色を失ひ度に迷ふ体一略一痛しや匠作、心は剛に勇め共、西の方玄蕃兄弟が勢敗軍に及諷次もなきを見、彌勇て衆を励せ共、旗本之勢も亦いつ減ずるともなく僅か三千計に成しかば、此勢にて利に乗たる多勢に向はん事如何あらんと長共申せしを、修理亮合戦の慣は左はなき物ぞ。千計にても心を一致にし、十死一生に極め、及合戦一時は勝物也。我に任せよと勇みければ、各尤なりと請ぬかほさが也」という状況に陥る。織田信長麾下随一の宿老として常勝將軍たる柴田勝家にしてみれば、猿相手に乾坤一擲の戦いを挑みたかったのであるが、側近の臣毛受勝助が「其は昔尾州において、度々軍になれたる下々あまた持給ひしに因て、其御働も有しぞかし。今度は見にげ聞逃に、数度あひたる下々にておはしまし候故、過半落失ぬ」と言うがごとく、戦況次第で行動を決める今仕えの越前の兵士であつてみれば、勝家

の意に任せない結果となつてしまつたのであろう。勝助は「是にていひがひなき討死をなされ、名も知ぬものゝ手にかゝり給はゞ、後代まで口をしかるべし。願くは北庄へ御帰陣なされ、御心しづかに御自害候へ。某御馬じるしを請取奉り、御名代に是にて討死をいたし候べし。其隙に急ぎ御帰陣被成候へ」と、兄毛受茂左衛門尉ともどもに殿をつとめる。『真書太閤記』によれば、馬印だけでなく鎧も着替て、全く勝家の扮装で身代りになっている。毛受兄弟は「我手之者三百余人、其外勝家之小姓馬廻少々左右に随へ」て、追討ちにする秀吉の軍勢を一手に引き受け「兄弟其外歴々之者共多く有て、突退け、突退け、息をもさせずたゝかひしか共、或手負或討れ、残りすくなに成にけり。勝介兄に向て、勝家退給うて、一時に余ぬべし。心やすくのき給ひなん。いざ心よく最後之合戦して、腹きらんと云まゝに、残りたる兵十余人引つれ突て出、散々に相戦ひ追ちらし、其後兄弟腹をぞ切たりける」とある。勝家は、勝助の忠死によつて北庄へ無事に落るわけであるが、この勝助の勇戦は「其身は柳瀬の流れに沈と云共、名は高峯の雲と立上り在し今。あつぱれ剛の者なりと、其比は市暨孩童までも口号み候し」と賞され、秀吉も北国平定の後「毛受勝介無二比類一遂忠死一たりと再三御感有て、母妹などに、堪忍領聊恩賜あり」、敵ながら天晴という次第であつたのである。さらに「毛受勝介は尾州春日井郡稲葉村人也。柴田修理亮勝家に、十二歳の比より事へ、後は小姓頭に任じ、領三万石地、素性信篤く、古風を事とし母に孝有。勝家敗北の折節、舎兄茂左衛門尉諸共に、忠死を快くし、其名尤かうばし」と伝える、今もつて後裔の方たちが、新堂の森の中にある墓域を守つておられる。

④木之本―伊部

八月廿一日、賤ヶ岳のユースを出て大音の里からケーブルで賤ヶ岳に登る。北を眺めると、余呉湖から昨日歩いた柳瀬―木之本までの街道はもとより、中尾山をはじめ賤ヶ岳に連なる山々も一望のもと、南を眺めると、琵琶湖から湖北の広大な平野が手に取るごとくに俯瞰できる。この頂上に陣すれば、中尾山から北国街道をはさむように布陣した越前勢の動向が、それこそ手に取るごとくであつたろう。街道に沿つて攻め込み、両側の山々から挾撃されないかぎり、秀吉軍の優勢は動かしがたいように思われる。勝家は、街道沿いに攻撃して来るのを満を持して待ち構えていたのであろうが。それはそれとして、戦国武将の興亡の实地検証をすれば、「夏草や」などという名句を生むほどの詩的感銘を受けるといふのでもないけれども、ほんの数時間の戦いによる勝敗によつて、大きく運命を狂わせられる戦国武将の激しい生き方に、大なり小なり感動を覚えずにはいられない。芭蕉自身は、賤ヶ岳古戦場のすぐ傍を通り過ぎながら、ついに一言の感慨をも書き残していないようであるが。

木之本地蔵の前から、再び北国脇往還を求めて歩き始める。浄信寺門前の南隣に、本陣という古い構えの薬屋があり、明治初年頃からと思われる古い薬の広告看板が店頭に並べてあるが、本日休業。古い屋並みが続いており、旧北国街道最大ともいえる宿場町の趣きを髣髴させる。多くの店の前面は近代的に改築されてはいるけれども。町中をしばらく南下、三叉路に突き当り、北国街道と北国脇往還との別れ途を近所のご老人に尋ねたけれど、確認できなかった。町の西外れにある北陸本線の木之本駅の西側を南下する国道8号線が、本道という意識を強く土地の人々に植え付けており、行きずりに

尋ねるぐらいでは満足できる返事は得られないのであろう。勘で三叉路を東へ向い、田部、井口と進む、田圃の中の舗装道路であるが、井口の集落に入るといくらか昔の俤なきにしもあらず、萱葺きの独特の形を見せる民家が点在していて、湖北の田園風景を彩る。井口から脇往還らしきを外れて東し、雨森の集落に行く、雨森芳洲（一六二一—一七〇八）の書院跡を訪れるためである。江戸中期の儒者として高名な芳洲の書院跡は小さな広場、芳洲を祭る小さな社があって顕賞碑が建っているだけ。芳洲の蔵した文庫が残っているというが休館日という有様。少し離れたところにある村社の小暗い木蔭で小休止。インスタントの昼食を社殿ですませて、高時川に沿ってしばらく南下、柏原の集落から西に向って渡岸寺に行く。湖北から湖東にかけて、何故か十一面観音を奉蔵する祠的寺院が多いが、慈雲山光眼寺と称する渡岸寺在の十一面観音は、その代表的なものである。現在、本堂の左手の収蔵庫（慈雲閣）に安置してある十一面観音の様子は、井上靖の『星と祭』の描写に依るを可とする。『確かに秀麗であり、卓抜であり、森厳であった。腰を僅かに捻っているところ、胸部の肉付きのゆたかなところは官能的でさえあるが、仏さまのことであるから性はないのであろう。左手は宝瓶を持ち、右手は自然に下に垂れて、掌をこちらに開いている。指と指とが少しづつ間隔を見せているのも美しい。その垂れている右手はひどく長いが、少しも不自然には見えない。両腕それぞれに天衣が軽やかにかかっている。』とある。信仰心に縁なきものにも宗教的感銘を与える美を備えている。この観音様も、『元龜元年豪雄浅井・織田両氏の戦火のため、堂宇は悉く烏有に帰し寺領亦没収』という災難に遭っておられるが、土地の人たちの信仰心に守られて現在

に至っている。このあたりの古い神社仏閣には、全て戦国末期の戦火の痕跡が残っているようである。

渡岸寺を後にして、再び高時川西岸に出てしばらく南下する。川向うの堤まで五〇〇米はあるうかという高時川の水も涸れ果てているが、左後方（東北の方向）に見える己高山（標高九二三米）からの連峯が川の向い側に姿を見せ、西方は木之本・高月両町の湖北の肥沃な平野が、ところどころにこんもりした林を持った集落を点在させながら、青い稲葉をなびかせて湖岸に向って広がっている。川岸の広い舗装道路を歩きながら、この真夏の風物だけは芭蕉と共有できているのではないかと思う。大きな橋を渡る、橋上から前方に小谷城跡を中腹に持つ小谷山（標高四九五米）が見える、馬上の集落に入る。大きな橋に連結する、五万分の一の地図に見られない新しい舗装道路に別れて、左手の旧街道らしきに入る。『北国きのもと道』という道標があって旧街道の面影を残しているが、二俣・丁野・郡上を歩む道が、果して旧街道か自信が持てない。各集落を結ぶ道が』という形になっていて（集落の中心部が、こうした形になっているのは極めてありふれたもので納得できるのであるが）、自然さにやゝ欠ける感じがするのと、話しかけるお店や民家の人たちに街道に対する認識がないからである。郡上の中心部で、七十才ぐらいのお婆さんが、『あのお家は、昔偉いお侍が泊っていたそうだ』と話して下さった古いお家のたたずまいが印象に残る。本陣では勿論なく、元酒造業かという感じ、不躰に裏口から尋ねると、これもまた七十才ぐらいの上品なお婆さんが、何も知りませんと井戸水を汲む手を止めて家の中に入ってしまわれた。時に、私どものごとき不躰なカニ族になやまされておられて避けられたのであろうか。郡上

から伊部への道は、旧道らしきが発見できなくて、舗装仕立ての道を辿る、伊部の本陣前に立って北に小谷山、西に虎御前山（標高二〇三米）を望み、一息つく。虎御前山にも砦があって、織田と浅井・朝倉の争いの間に様々の攻防があったところ、伊部の集落は丁度小谷城と虎御前の砦の中間に在る、戦国武将たちが馳駆した中心地であつたらう。伊部の本陣は、大正年間の大地震で門と倉を残して倒壊、その後再建したものとのことであるが、本宅も旧姿を再現したもので、中山道の田舎の宿場に見た本陣に酷似した姿を見せてくれる。今夜の宿は、小谷城跡の搦め手にあたる須賀谷の温泉で、宿のマイクロバスに迎えられて谷間を行く。

○刀根坂の勝利から朝倉義景自害（天正元年八月廿日）に至るまで、わずか十日あまりで越前一国を平定した織田信長は、八月廿五日に江州虎御前山に帰陣したまひて浅井父子か居城責手くを被仰付二又小谷を、幾重ともなく取まかせたまふ（『浅井三代記』以下引用文同じ）という神速ぶり、信長の面目躍如という感がある。すると、『浅井下野守久政か丸と子息備前守長政か丸との間中の丸』に籠っていた連中が助命を求めて来たので、木下藤吉郎に占拠させる。かくして浅井父子の間の連絡は絶たれてしまふ。信長は、かうしておいて長政に和議を申し入れるが、長政はこれを拒絶して、廿六日の夜、菩提坊主雄山和尚を導師にして自らの戒名『徳勝寺殿天英宗清大居士』を彫り込んだ石塔に焼香、『竹生島より八町東の沖中へしつめ』る。信長の和議申し入れて戦意を殺がれていた城中の軍兵も、『心一筋に成討死を心懸ける』となる。『廿八日巳刻』、再三の信長の和議申し入れの後、お市の方と三人の女子を信長に送る。『廿八日の夜中』のこ

とである。『去程に信長卿は小谷の北方を取かへし斜よりこひ浅井は城を枕とし腹を切へき覚悟をすゑけると見えたり此上なれば一刻にもみ落すへしとて京極つふら尾といふ所へのほらせたまひ惣軍勢に下知』する。『京極つふら尾』というのは、『真書太閤記』などに秀吉が竹中半兵衛などに守護させていたと伝える『浅井父子の城の間なる京極曲輪』が当るのであるうか。ともあれ久政の砦では、『雑兵八百計も籠りけるか寄手廿八日未の刻より夜の中共いはす廿九日の午の刻迄揉にもむて攻たり』という有様で、久政は自害、一方『妻子共をそこくに相かたつけ』た長政は、『今ははや心にかゝる事なしさ切て出一軍せんとして手廻小姓五百計にて討て出たまふ長政其日の裳東には黒糸綴の鎧に金襴の袈裟をかけ朱柄の長刀をふって門をひらき切て出たまへは寄手我討取高名せんとして猛勢の中に引包む長政の勢五百計一足もひかすあたるを幸と切伏せ追まくりたまへは寄手猛勢なりとハ申せとも一町面崩れ散々はつと引ければ丸の中へそ引にける』と勇猛ぶりを発揮する。本丸に引きあげた浅井勢を猛攻する織田勢も、『誰助力り申さんといふ者一人もあら』ずという勢いに攻めあぐむ。一夜明けて久政の自害を知った長政は、『父の甲合戦をなさんとて九月朔日の巳の刻計に門をひらき二百計にて切ていたまひ猛勢の中へ面もふらす切入四方八面にはたらき敵何程といふ数をしらす切伏く一足もひかす相戦ふ事高祖のいきはひもかくこそあらめとしられたり』。その留守に『木下柴田前田佐々』の人々が本丸占拠、本丸へ引返すことができなくなった長政は、城の左脇にある赤尾美作守の屋形に入り自害する。『此長政十六より武將を取一度もにふき事あらさりけるか最後のきは迄かく手はやく御腹めさ

れし事古今まれ成剛将なりとて敵も味方も感しける”。小谷城の攻防は、わずか六日ばかりで終ったのである。

宿舎の須賀谷温泉は、小谷城跡の搦手に当っており、小高い小谷山を望めば、全面緑に覆われているけれど、蔦かづらが這いのぼって奇形の松杉を支えているという急峻で、所々に奇岩怪石が姿を露呈しており、一見して搦め手からの攻撃は不可能という感じである。この急峻を指しながら、この宿の仲居さんが、小谷城陥落の挿話として、白米城伝説に類する話をしてくれる。難攻不落の小谷城を攻めあぐんだ織田軍は、木下藤吉郎が伏樋の水源を発見して断つ、水不足をかくそうと浅井軍は白米で馬を洗う、しかし遂に水に渴して落城するというのである。この白米城伝説は、『日本伝説名彙』（日本放送協会編）に摘録され、「木思石語」（『定本柳田国男集』第五卷所収）に論じられているところであるが、全国的に存在する伝説のようである。しかし、小谷城落城についての記録には、遂に白米城伝説に類する話題は見えない。わずか五・六日の攻防で小谷城は陥落したのであるから、実録的には存在しないのが当然であるが、「木思石語」の『白米城伝説分布表』にも見出すことができないのである。とすれば、須賀谷で聞いた白米城伝説は、仲居さんの創作ということになる。果してそうなのであろうか。仲居さんの話には木下藤吉郎が出て来る。藤吉郎は、小谷城攻めの功績第一と賞されて、江北の守護所と被成小谷の城に浅井郡に坂田郡半分犬上郡を被下ける」というのであるから、この話は一層迫真性を帯びてくる。そして、この白米城伝説では木下藤吉郎が敵役になっているのである。一般に、湖北から湖東にかけての浅井家の版図内では、浅井

眞轟の空気が何とはなしに感得される。そうした空気の中で、易々と落城したのではないという思いが凝って、藤吉郎を敵役に仕立てる白米城伝説の移植創作が行なわれたのではなからうか。柳田国男の言葉を借りれば、「其土の久しく荒れて、秋の草の離々として居たといふことに、やさしい物の哀れを感じて居た人々」（木思石語）の一人である仲居さんの移植伝説に、私どもは古城址のほとりで旅情を慰められたのである。

⑤ 伊部と小田

八月廿二日、須賀谷温泉のマイクロバスで、孤篷庵と姉川古戦場を見学する。孤篷庵は小堀遠州の菩提寺で遠州一族の墓があるとともに、遠州流の粹を尽した池泉廻遊式の庭園は瀟湘八景を模して幽邃である。姉川古戦場には「元亀庚午古戦場」と彫った石柱と松の大木のもとに戦死者之碑があるのみ、ともに北国脇往還とは少し外れている。再び伊部の本陣前、酒屋の六十才過ぎの御主人が旧道を教えて下さったので、勇躍歩き始める。伊部の集落の南外れにある小さな川（田川と言ひ、下流で姉川と合流、琵琶湖へ注ぐ）を渡ると、左手の田園の中に草ぼうぼうの野道が尊勝寺の集落に向って続く、現在の舗装された道路と数米離れて平行している。これが旧道とすれば、木之本から伊部に至る道は、一層旧道を歩いたとの自信をなくさせる現実である。尊勝寺から八島の集落を経て草野川橋を渡るあたりは、旧道と新道とが複雑に交叉していて、お年寄に説明を聞いてもよく判らない、説明者自身が、幕末時と明治期と現在とあれこれ混乱している節がうかがえた。今は工場地帯になっている草野川橋の周辺は、元は奥深い森で、追はぎも多かったそうだと八島で会ったお婆さんが話してくれる。

地図で検すると、姉川古戦場の記念碑のある数百米北側を、姉川に平行した道を野の集落を経て佐野の集落に出るが、姉川を望見することはできない。佐野の外れにある神社で一休みして、お店の若奥さんに旧道を聞いても不明。偶然通りがかりの七十才過ぎのお爺さんが、途中まで行くからと案内して下さる。佐野の外れからしばらく行つて、左手の山道に入る。今莊・相撲庭の集落の北の山手で七尾山（標高六九一米）の麓を、姉川と平行して伊吹山（標高一三七七米）の方に向つて進むのが旧道である。平坦な山路の両側には、杉の大木が林立するところ、道祖神が祭つてあるところ、灌木が生ひ茂つて道を覆つているところなどあつて、旧道の面影を満喫する。しかも、伊吹山の男性的雄姿が時に大きく目に飛び込んで、『おくのはそ道』の旅の後、斜嶺亭で、

其まゝよ月もたのまじ伊吹山

の句を残した芭蕉の目に映じたのも同じ伊吹山かと、歩を早めるよすがとする。姉川の対岸にあたる井之口あたりの集落を望見しながら山道をたどると、土地の人が農免道（？）と呼んでいる新しい大きな舗装道路に出る。その道を横切つて旧道を求め、姉川の対岸にある小田（やないだ）を目指すが、道に迷つて再び農免道に出てしまふ。新しい橋を渡つて、小田・春照への道をあきらめ、今夜の宿の上野を目指して伊吹の集落に入る。伊吹一族の古い屋敷の並ぶ伊吹山麓の斜面の町並を通り過ぎ、開発途上の荒廃した丘を越えて、上野の集落の外れにある民宿のユースに宿る。伊吹山の麓の小高い所に位置する宿からは、伊吹山腹を掘り崩している大阪セメントの大工場や本陣のあつた春照の宿場、遠くに東海道新幹線を走るアイポリーホワイトのひかり号も望まれる。

夕食後、私たちの旅の目的を聞かれた七十才を越したペアレントが、小田から藤川までの旧道を、大変判りにくいからと、車に乗せて前検分をして下さる。山道の出口・入口を教えて下さるが、夜目としてはつきりしないところもある。しかしこれで明日こそ本当の旧道をたどれると喜び合う。

○「かくて信長卿の諸勢姉川表の合戦其日の辰の刻にはしまり未の刻に終り」（『浅井三代記』）というのであるから、姉川合戦はわずか六時間あまりで終つてゐる。元龜元年六月廿八日のことである。この合戦は、元龜元年四月、織田信長が越前の朝倉攻めをしてゐる背後で、浅井長政が背信して信長を脅かしたことに端を発する。朝倉攻めそのものが、浅井家に対する信長の背信であつたのだから、浅井長政の挙兵を責めることもできないが、背後を断たれて身の危険を感じた信長は、急遽京を経て岐阜に帰着、態勢を再整備して、六月十八日に数万騎を引率し、浅井攻めにかかる。横山城攻めの攻防などの小競合があつてのち、信長勢数万と「家康卿手勢五千餘騎」に対して、「搦して浅井か勢八千餘騎」と「越前勢は一万三千騎」とが姉川を挟んで迎え撃つ形となる。織田・徳川連合軍と、浅井・朝倉一向一揆連合軍の対決である。激戦数刻、当初浅井・朝倉勢が優勢で、「平泉寺の法師武者いさ追払はんといふまゝにひし〜と討出徳川殿の先勢にひしと合合姉川を打越追つ返しつ討つ打れつ火出る程戦ひ」、やがて「越前勢勝にのりいきほひかゝつて川をむかひへ打あがる」、そこへ浅井勢も「搦懸り」で追撃、「信長の備給ふ十三段の勢を十一段迄切崩す信長卿は手に汗をにきり御腹めさるへきとの覚悟なり」とまでになるが、徳川勢奮戦して劣勢をはね返す、その勢いは「家

康卿の勢一足も不退首を取もありとらるゝもあり十文字にかけやふり巴の字に追廻し太刀の鐔をと矢さけひの音天地にひゝきて攻戦ふ”といふ有様、朝倉勢を追ひ散らして、信長の本陣を攻めていた浅井軍に横繩を入れ、横山城の押への軍として配置してあった”氏家常陸介入道卜全伊賀伊賀守三千餘騎”とともに総攻撃して、浅井・朝倉連合軍は”味方惣敗軍にそなりにける”。浅井方の勇将磯野丹波は佐和山城へ、浅井長政は小谷城へ引き退く。其日味方へ討取首八百餘うたるゝ兵千七百なり今日の軍に家康卿の横繩暫時の間をそかりせは信長卿を討取へきものをと今に至る迄人皆申あひにけり”というのが、『浅井三代記』の記述である。『信長記』では、一層信長びいきで、”角て頸数都合三千餘、義昭公へ持せ”と大仰であるが、戦局の在り様は大差ない。兵力も武具も劣勢の浅井・朝倉一揆勢が一時的にせよ優勢だったのはやはり信仰の力なのであろうか。

夏の水枯れ時であったからか、左程水量も多くななく、せいぜい数百米幅のありふれた姿を見せている姉川を狭んで、川水を真赤に染めたであろう激戦が行われ、戦国武将の運命が瞬時に決していった歴史を想起すれば、周辺の風物が荒涼としていただけに、一種の感慨に打たれざるを得ない。北国脇往還から数歩南に向えば、姉川の古戦場である。芭蕉はしかしこの古戦場の風物を記録に残してくれていない。

○小田・関ヶ原

八月廿三日、前夜のペアレントの案内に従って、姉川にかかる古い橋（ペアレントは越前橋と呼んだけれど、橋柱の文字がよく読みとれなかった。）まで引返す。敗戦後のジェーン台風か何かの洪水

の時、姉川に架っていた橋は全部流れたのに、この橋だけ残ったというが、今は老朽化して通行不能の残骸をさらしている。旧道を利用する人が居なくなっているから、木橋の残姿を見られたのでもあろう。この橋から小田の集落までは、田圃の中の一本道、小田の集落をかすめるように通り過ぎて小さな神社前の道を進んでいくと春照の宿場に出る。春照の本陣跡は児童図書館かになっていて、昔日の俵はないけれど、通りがその周辺数日間だけ広くなっていて、昔の宿場の溜り場だった様子を偲ばせる。春照の町並を行き当ると、昔の常夜燈のある四又路に出る。その路を左手に行くと大阪セメントの大工場の前が出る。工場を通り過ぎて更に左手の伊吹山の方に向かって登ると、右手に旧道への入口が見えてくる。工場前あたりからは、幅広い産業用道路が出来ていて、旧道の俵はないけれど、能頭（のがしら）というところへ向うこの道は、旧道の俵をそのまま残している。伊吹山の麓の斜面を横切る道は、丈なす雑草木が茂る平坦な野道で、昔茶店を開いていたという能頭には、過疎地の廃屋に近い農家が数軒残っている。今も人が住んでいるのかどうか。このあたりから立木の中に入り、神戸というところあたりで建設工事中の農免道に出て、旧道が判らなくなってしまう。大清水の集落へ向う道が右手に見えたり、上平寺の集落へ向う旧道を示す古い道標が左手に見えたりする所を歩き過ぎて、旧道を求めて右手の山の中に入って行く。道端の雑草を刈り倒したばかりの谷間の道に下りてしまい、道に迷ったかと思ひながら谷を上ると眼前が開けて、寺林の集落に出る。やはりあれが旧道かと納得する。寺林から藤川までは、人家の点在する山添いの野道で、ふと東海道の小夜の中山峠の頂上付近の平坦な道を想起したりする。藤川には、古い大きな構え

の庄屋風民家も見受けられ、旧街道の姿を隘裏に再現するよすがともなる。藤川の外れから少し坂を下ると、広い国道に出る。右手の谷底に藤古川を見降す谷間の国道を少し進めば、近江と美濃の国境となっている。この国境に立って藤川のあたりを振り返れば、賤ヶ岳の合戦の時、大垣から急行する秀吉軍のため長浜の地下人が松明を「山々峯々」に連ねたというのがこの辺りでも含んでいたとすれば、さぞ壯観であつたろうと思われる景色である。井本農一氏は、『奥の細道をたどる』においてこのあたりのことを「木の下までは北国街道だが、それから本街道とは別れて、道をやや東へとり、佐野・今庄・小田・春照・大清水・寺林と伊吹山下を通り、藤古川を越えて、美濃の国の玉たまに入り、関が原を通って大垣へ出るのだという。野頭のがしらの茶所ちかじよというようなところもまだ残っているが、そこは大名行列などが伊吹山下で茶を煮て一休みするような設備の場所だったという。」と記す。北国脇往還の道筋からいうと、大清水は少し南に外れる集落であり、ペアレントは野頭ではなく能頭だと強調していた。藤古川を越えるのは、寺林の外れでまだ小さな流れ、後は藤古川を右手の谷底に見て進む形になる。

国境を越えると、玉と小関の集落を過ぎて関ヶ原、中山道の古くからの宿場町、玉から関ヶ原までは広い国道を進むのみ。小関に旧道が残存すると聞いたけれど、よく判らないままに笹尾山に登る。関ヶ原の戦の石田三成陣跡で、関ヶ原の全景が一望のもとである。戦略的だけ言えば、うまく東軍を関ヶ原の狭間に誘い込んだ西軍が、笹尾山と南宮山・松尾山に配備された軍勢によって挟み撃ちする形になっていて、石田三成にしてみれば勝算十分だったのではないかなど思う。小関・小池の集落を通過して国道を外れ、関ヶ原合戦

開戦地の石碑やら島津義弘陣所跡やらを見ながら不破の関跡へ。かつて中山道を行脚した時面白い説明をして下さったお爺さんはなくなっていて、テープコーダーの無機質な説明を聞く。ここから旧中山道の道を西に逆行して山中へ。常盤御前の墓なるものを拝するためである。民家の裏の片隅といった感じのところに墓があり、芭蕉の「義朝の心に似たり秋の風」の句碑が建っている。

山中よりバスで関ヶ原駅、七百年の伝統を持つと称する榎屋旅館に投宿する。宿の老女中さんが、昔の関ヶ原の宿場は、道の真中に小さな川が流れていて柳の木が両側に植えてあり、大変風情があつた、今道が広いのはその川を埋めたからで、両側の町家を移動させたのではないと話してくれる。雪深い関ヶ原のこと、柳瀬宿の道と川の在り様を想起して納得する。それにしても、雪深き故に柳瀬線を廃止した国鉄が、なぜ同じ宿場町の智恵を示している関ヶ原に新幹線を通して、冬場の交通混乱を招いたのであろうか。中世の京への官道であつた関ヶ原を避けて鈴鹿越えの東海道を設営した徳川家康の故智を学ぶべきではなかったかなど思う。

○姉川の合戦も賤ヶ岳の合戦も天下分け目の合戦であつたが、最も壮大なドラマとしての天下分け目の合戦は関ヶ原の戦である。ただこのドラマは、合戦のそれというより政治のそれという色合いが強く感じられる。古戦場に立てば、現場の風物と合戦の挿話とに、戦国武将の剛さ華かさと一抹の哀愁が漂って、そこに詩情も湧こうというものであるが、舞台が大き過ぎるせい、新幹線やら高速道路やらで開発の波の押し寄せているせい、それより何より人間の欲とか謀とかがぎらぎら脂ぎっている合戦ドラマだけに詩的感興が湧いて来ない。ただ、この人間臭さは近時大衆小

説家の興を惹くらしく、司馬遼太郎に『関ヶ原』という小説あり、「週刊朝日」の連載小説『真田太平記』（池波正太郎）が関ヶ原合戦に筆を進めているし、「サンデー毎日」では企業小説のホープ堺屋太一が『巨大なる企て』なる小説を関ヶ原合戦をテーマに連載し始めている。刀根坂も賤ヶ岳も姉川も無視した芭蕉は、もちろん関ヶ原も黙殺する。そして「甲子吟行」の旅で不破の関跡と常盤御前の墓と称する塚の前で、懐旧の情を披歴する。平治の乱の後清盛に侍した常盤御前の墓がこんな所にあるはずもないことは、平家ぐらひは読んだであろう芭蕉は百も承知。芭蕉にとつてはその墓が本物かどうかが問題なのではなくて、それが彼の詩的感興を喚起する鍵になるかどうかが大変なことであつたのであろう。

①関ヶ原―大垣

八月廿四日、大垣まで最後の行程の日、運悪く雨が降り始める。雨中を東首塚・床几場など見学して関ヶ原町郷土館へ、宿場絵図などあるが、館長さんはもっぱら関ヶ原合戦の様子を講談調に説明して下さる。やっこの思いで本陣跡が古木一本残すだけであることなど宿場のこと聞き出し、館を出る。玄関傍に旧街道の道標が数箇ころがっている。道路拡幅で邪魔になつたものを運んで来たもの、何処に建っていたものかも判らないとのことである。道しるべなどは、元の位置にあつてこそ意味があるのと思う。文化行政の貧寒を感じる。館を出て本陣跡の前を通つて国道21号線を東進、桃配山の徳川家康最初陣地跡の少し手前から左手に別れる道があり、時に松並木もあつて旧道らしき姿を見せてくれる。野上を過ぎ日守あたりで旧道が国道と交叉する。それを少し進むと垂井の一里塚であ

る。再び国道を横切り東海道本線を越えると垂井の宿場に入る。途中に南宮行の古い道標を見る。曾良はこの道を南宮神社（美濃一宮である）へ行ったのかと思ひながら（『曾良随行日記』によれば、野上から脇道に入っている）、無視して直進する。大げやきの根元に尽きることなく清水の湧く垂井の泉で一休みし、大垣への道を履物屋さんの故老に聞く。大垣に行くには、中山道を赤坂に出て大垣に行くことはなく、美濃路を直接大垣に出るのが当然と力説される。美濃路も昔の面影はもはや見られないとも淋しそうである。

垂井の町並みを抜けて相川の橋を渡ると、道が左右に別れていく。追分というところで、左が中山道、右が美濃路である。美濃路に向うと、左手にユニチカの大工場があり、道も広く舗装されているが、昔の松並木がところどころに残っていて風情を添える。東海道本線を再び横切つて昔風の家並みの続く綾戸の集落を越すと、国道21号線に出る。ここから大垣までは一直線である。途中、長松町というところで左に外れる旧道らしきがあり、そこに入っていくと美濃路の道標を発見する。ほんの数百米の間だけだが、旧道の姿を見る。それ以外は広々とした舗装道路が一直線に何の変哲もなく担々と続くだけで、平野の中を大垣の町に入る、雨中の行進である。

この数日の行脚で疲れ果てた一行は、大垣ご出身の本学の三輪教授（大垣の銘酒「鉄心」の醸造元たる三輪酒造の出自の方）に迎えられる。大垣近郊の養老温泉で英気を養い、翌日、大垣市内の俳蹟を案内していただく。三輪教授のご紹介で、土地の故老や教育委員会の文化財関係の方々が、大変親切に説明して下さる。まず、舟町の正覚寺で尾花塚・梅花仏を始め多くの句碑や谷木因の墓を拝し、敗戦直前の戦災で焼失したとはいえ、古い土蔵などに城下町の面影

を残す街路（広い所は、運河を覆って暗渠にしているとかな）を通り、奥の細道むすびの地として数々の塚が建てられている舟町港跡に向う。水門川をはさんで小公園という趣を呈している史跡の中では、三四間の高さはあるうかという古風な船燈台と川面に停泊しているモデルの古い運送舟が印象的である。（この辺のことは、井本農一氏の『奥の細道をたどる』の大垣の条に詳細である。）この舟町港のある水門川は、南流して揖斐川に合流、その大きな流れがやがて海に出て伊勢・桑名へ向う。芭蕉も伊勢遷宮を拝するため、この舟町の港の石段を連中に見送られながら降りたのであろう。

舟町港跡から、関ヶ原の合戦の前哨戦として何かと争奪の対象となった大垣城（戦後再建の鉄筋のもの）へ、そこで豊富な収蔵品を見学する。輪中で著名な濃尾平野のこと、城の石垣に残る洪水時の痕跡に、むしろ強烈な印象を与えられる。千本松原の薩摩藩の苦斗と悲劇が脳裡をよぎるからであらう。お城から豪壮な大垣市民会館へ。現在の大垣市民の文化の城である。大垣の文化や文化財について、館長さんや文化財係の方のお話があり、大垣の文化財を紹介する映画を見せて下さる。財政上の問題もあるのであろうが、関ヶ原の町の対処の仕方に比すれば、文化というものに対する理解の在り様に大きな隔たりがあるような気がする。

大垣駅頭で一同解散。同行者の名前は、本学国文学科第三学年学生の安藤真由子・碓井瑞江・沖原ミスカ・金田より子・桑田典子・小林幸恵・深田美和子・福場京子・藤原富美子・細谷美也子・盛政朋子・山地康子の諸君と豊後敬氏（廿日市高校）である。

○大垣市から北東の方を眺めると、中山道の宿場たる赤坂の集落が見えるが、そこにお勝山と称する小高い丘がある。赤坂村の

南五町、平野に隆起する獨基の岡山なり、東側の水田より高さこ
と凡五十米突。其頂に於て南北六十間、東西二三十間許の平担あり、築壘穿濠の痕跡今にのこり、庚子の役の陣営址たることを示す。近世の俗、徳川公の遺蹤たるを以て、特に貴みて御勝山の名を命じたり。（『大日本地名辞書』）とあるのがそれである。『三河後風土記』によれば、慶長五年庚子九月朔日江戸城を御首途にのぞみ、石川日向守家成今日は西（ニシ）塞（セキ）にて候へば、他日を撰んで御首途有るべくもやと申上ぐれば、神君聞召し、いやとよ西方塞るゆゑ吾行きて是を押開く也と仰せられ、御馬を進めらる」と勇躍江戸を発った家康は、二日は藤沢、三日は小田原、四日は三島、五日は駿州清見寺、六日は島田、七日は遠州中泉、八日は白須賀、九日は岡崎、十日は熱田、十一日は清洲と西下、清洲で一日滞留して十三日は岐阜、そして、其日（十四日）午刻赤坂へ御着陣あり、直政忠勝兼ねて御陣所を經營せし事なれば、爰かして御順覽まし、岡山御本陣に入らせ給ふ。のである。江戸から赤坂まで二週間をかけて、悠悠と天下の状勢を觀望しながらの西下である。一方、赤坂に陣を張る東軍の先遣隊が動かずに居るのを拱手傍觀していた大垣城の西軍は、家康着陣に際して、九月中旬頃までも大垣城中にては、内府此頃は奥州会津に於て合戦最中なるべし、上杉方より吉左右今日か明日かと評議して居たる所、近日赤坂の諸將陣替の様子不審せしが、其中に内府奥州の事何と治りしや、けふ赤坂へ着陣ありしといふ者もありて、城中上下驚く事限りなし、”という有様。総大将を迎えて勇み立つ東軍に対して、何となく戦意を失っている西軍の様子がうかがえる。それにしても西軍の情報不足は、全軍の不統制ぶりを示している。余

裕緯々と旧領地の東海道を進軍した家康は、赤坂着陣後正に電光石火の動きを示す。西軍が仕掛けて来た株瀬川堤上の小競合は適当にあしらって、翌十五日は関ヶ原で「辰の刻に始り、其終りは未の上刻頃」という時間帯で乾坤一擲の戦いを挑み、大勝利を博するのである。この天下分け目の戦いにおける本陣であった赤坂岡山をお勝山と呼ぶのは、徳川治政の近世人として当然であったろう。

ところで、日光東照宮で権現様に拝跪した芭蕉も、この権現様の戦跡には興を示さない。赤坂近辺では、お勝山の先にあたる金生山（標高二一七米）頂の明星輪寺虚空蔵に参拝し、

赤坂の虚空蔵にて 八月廿八日奥の院

鳩の声身しづみに入わたる岩戸哉 （漆島）

の句を残し、青墓近くの朝長の墓に詣でて、

みのゝくに朝長の墓にて

苔埋む蔦のうつゝの念佛哉 （花の市）

の句を残している。芭蕉の興の在り様も、こうしたところに示されているといえようか。

四

大垣市の教育委員会でいただいた「五講 大垣俳跡めぐり」（解説・大野国比古）に「芭蕉木因如行送別連句塚・如行霧塚」の解説があり、その註として「函書館蔵の『荊口句帖』によると、芭蕉の大垣着は赤坂を経由八月二十八日と推定される。」との記述がある。ここで問題となるのは、①赤坂經由（即中山道經由ということ）②

八月二十八日着という二つのことである。

まず、赤坂經由ということについて、教育委員会の方は、『漆島』の句に廿八日とあること（『荊口句帖』によって廿八日大垣着と信じておられるので、虚空蔵参詣は敦賀から大垣への途次としか考えられないわけである。一旦美濃路を経て大垣に着いて、その日のうちに虚空蔵詣でというのは不自然だからである。）また『おくのほそ道』の表現によれば、大垣に着いた芭蕉が足を止めたのは、木因宅ではなくて如行邸であったらしいこと（美濃路をたどれば木因宅が道順だけれど、中山道を赤坂經由で大垣に入れば如行邸が道順に当るといふ。）という二点を挙げられる。道順という後半の論点は、土地の人でないといふ指摘で、十分な説得力を有する意見である。しかし、この点だけに関して言えば、曾良の随行日記に、曾良自身が芭蕉に先行して大垣入りした時、南宮を拝して大垣に入りながら（美濃路より更に南の間道のように、大垣に入るときは美濃路と合流するらしい）、木因でなく「如行ヲ尋ねていたのである。曾良は、如行が留守であったにもかかわらず、「息、止テ宿ス。夜ニ入、月見シテアリク。竹戸出逢。清明。」という有様で、如行の子息が不意の客を心ゆくまで接待し、曾良も心を許して安息しているのである。曾良にしてそうであるから、芭蕉とて大垣といえば最初に如行のことが念頭に浮んだのもあろう。芭蕉と曾良との間では、すでに早くから打ち合せ済みのことであつたのである。うか。元禄二年七月廿九日付如行宛書簡が、そのことを暗示する。舟問屋の主人で町人といへ古くから交友のある木因と、大垣藩士であつた如行と、芭蕉が差別するはずもなかったけれど、曾良も士族の端くれであつたということにもからんで、士農工商の階級意識

が定着していたであろう元禄という時代において、同じ士族のよしみということでも如行邸に足が向いたということも考えられないではない。いずれにせよ、ここで道順ということに必ずしも拘泥する必要はないであろう。

さて、八月二十八日という大垣到着の日時については、古くから多く論じられているところ、『詳考奥の細道』（阿部喜三男著・昭和三十四年九月刊）に従前の諸説が整理紹介されて以降の注釈書には、厚薄の差はあってもこの問題に触れられている。近時の代表的注釈書『奥の細道講読』（麻生磯次著・昭和三十六年九月刊）、『おくのほそ道全講』（松尾靖秋著・昭和四十九年十一月刊）などでも、それぞれの立場から詳論されているし、この問題に関する論文も紹介されている。それらは、九月三日説、八月末日説、八月廿八日説、八月廿一日説に大別される。それらについて一一紹介する煩に堪えないので、ここでは大要を述べる。古くは、『野あらしの巻』の歌仙前書に「元禄三年九月三日落着の夜」（『金蘭集』、『一葉集』）には「九月三日落着の夜」とあり、曾良が芭蕉に再会するため再び大垣に出て来たのが三日（『曾良随行日記』）ということから、九月三日説が有力であったけれど、そうすると大垣到着から伊勢に向けて出発（『曾良随行日記』）にも九月六日と明記）までの日時が短か過ぎ、八月十六日種ヶ浜遊興後、『おくのほそ道』にはすぐ「露通も此みなとまで出むかひて、みの、国へと伴ふ」と記されているにしては敦賀・大垣間で過ごした日時が長過ぎることから八月末日説が提出され（前出歌仙前書の「落着」の語義にも、到着の意ではなく披露の意ではないかとの疑義も提出された）、その後『荊口句帖』が発見されて「芭蕉翁月一夜十五句」の序に「元禄己巳中秋廿

八日以来、大垣庄杭瀬川辺路通敬序」とあり、前出虚空蔵での発句詞書に「八月廿八日奥の院」とあるを併せて八月廿八日が説かれ、『荊口句帖』の序を松井利彦氏が「廿一日」と解説されて八月廿一日説が出されるに至っている。「大垣俳跡めぐり」の解説は、松井氏説提出以前における説を採用しておられるといえよう。

ところで、九月三日説に対する反論として、麻生磯次氏の『奥の細道講読』において「九月三日に曾良が大垣に出たことは、その日記によって明らかであるが、芭蕉がその日に到着したとは書いてないので、一の理由はそれほど重要なものではない。」とされている。しかし、この事実は、九月三日説を否定する積極的な論拠になるのではなからうか。というのは、長嶋の大智院で療養していた曾良であるから、大垣の如行から芭蕉到着の連絡があつて後（大垣から連絡もないのに、芭蕉の到着日時を見はからって大垣に向つたとは常識的には考えられないことである。）自分の病状をも考えながら大垣に向つたに違いない。『曾良随行日記』では、九月二日の条に、「晴。大垣為行。今、申ノ尅ヨリ長禅寺へ行而宿。海蔵寺ニ出会ス。」とあつて、この日に大垣行の行動を開始している。とすれば、この日までに芭蕉の大垣到着の通報があつたわけであり、また少くも大垣から長嶋までの通報に丸一日はかかっているから、曾良が通報後直ちに行動を起こしたとしても、芭蕉の大垣到着は八月末日以外にあり得ないこととなるであろう。

いずれにせよ、現在までに提供されている諸資料を整理し、私流に妄想推測を加えるならば、関が原から垂井を経て美濃路經由、八月廿一日以前大垣到着というのが結論であるが、以下諸資料に基づいて私的推理を記す。

山中温泉にくつろいだ芭蕉は、七月廿九日付如行宛書簡で「名月、湖水か若みのにや入む。何れ其前後其元へ立越可申候」と告げてやる。八月上旬には、如行もこの書簡を受取り、大垣周辺の俳友たちと芭蕉歓迎の心準備を整えていたであろう。が、この書簡では曾良の病気のことには触れられておらず、山中温泉からは曾良が先行して芭蕉の一人旅になつてゐること（北枝・等裁が同行しているけれども）については知らされてなく、敦賀への出迎えなどは考へていなかったと思われる。芭蕉に先行した曾良は、八月九日敦賀に着いて十一日出立までに、氣比神宮参詣・金ヶ崎古戦場見学・種ヶ浜本隆寺宿泊・常宮神社参詣・西福寺見学と、芭蕉が敦賀滞在中に見学したとほぼ同様の行動をした後、十日に出雲屋弥市良へ「金子壹兩、翁へ可渡之旨申頼、預置也」、十一日敦賀出立前天屋五良右衛門を尋ねて「翁へ手紙認、預置」て、「巳ノ上刻、ツルガ立」つている。この手紙の内容については、推測に過ぎないけれども、出雲屋へ壹兩託したこと、大垣から迎えの人を寄越すよう依頼することが書かれていたのではないだろうか。敦賀から四日経て十四日に大垣の如行宅に着いた曾良は、如行に実情を話して芭蕉出迎えのことを依頼したに違いない。この十四日の曾良の行程は、『曾良随行日記』によると、関ヶ原ヲ立。野上ノ宿過ヲ、右ノ方へ切テ、南宮ニ至テ拝ス。不破修理ヲ尋テ別龍靈社へ詣。修理、汚穢有テ別居ノ由ニテ不逢。弟、斎藤右京同道。ソレヨリスグ道ヲ經テ、大垣ニ至ル」というのである。垂井から南宮に向つたのではなく、野上から南宮への近道を進み、南宮から大垣までも間道を進んでいると思われ。行程から言つて半日で踏破できる距離である。南宮で少々時間を要しても、午後三時頃までには如行宅に着いていると思われ

る。その時如行は留守であつたけれど、その夜もしくは十五日に曾良の依頼を受けた如行は、芭蕉歓迎の心準備をしていたことでもあり、早急に出迎えの人選（路通）を終えて、出発の準備をしたであろう。師匠たる芭蕉を迎える特命を受けた路通（『おくのほそ道』の行脚に当初同行する予定だったとも伝えられる路通であつてみれば、自ら特に申し出たかも知れない。）は、欣喜雀躍飛び立つばかりの心境であつたらうが、当面如行が留守であつてみれば、十四日に大垣を出立することは不可能であつて、早くても翌十五日早朝出立ということであつたらう。恐らく路通の出立を確認した曾良は、芭蕉にも手紙を残し（大垣での事柄や自分の落ち着き先、大垣到着後の連絡のことなど書き残したのであらうか。）て、「辰ノ中刻、出船」する。もし十五日大垣を發つたとすれば、この路通は、一時乞食の境界にあつたとも伝えられる人として、恐らく地理に明るく健脚であつたらうから、少くも十六日の夕刻には敦賀に着いたと思われる。病者である曾良が、十一日敦賀から木之本までを七時間あまりで踏破している（『曾良随行日記』によれば、「巳ノ上刻、ツルガ立」申ノ中刻、木之本へ着」とある。）のだから、路通の足でなら大垣から敦賀まで二日間で充分過ぎる。目的が目的だけに寄り道するはずもないのである。曾良から敦賀での俳友のことを説明されている路通は、十六日の夕景には恐らく天屋五郎右衛門宅を訪れたであらう。

十六日、芭蕉は天屋五郎右衛門ともども種ヶ浜に行つてゐる。「夕ぐれのさびしさ感到堪たり」と言つてゐるし、曾良も本隆寺に泊つてゐるから、芭蕉もその夜は本隆寺に泊つたのもあらうか。もっとも曾良は「色濱海上四り。趣。戌刻、出船。夜半ニ色へ着。」

と夜に種ヶ浜に向っているから、逆に芭蕉も夜半敦賀へ帰っているかも知れない。いずれにせよ、十六日の夜半、もしくは十七日のうちには、芭蕉と路通は久しぶりに顔を合わしているはずである。曾良の置手紙で、恐らく出迎えのことを予期していたであろう芭蕉も、そこに愛弟子路通の顔を見出だして蘇生の思いをしたのではあるまいか。大垣帰着の時、多くの弟子たちが「蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたわる」というが、ここでの芭蕉自身の感慨もこれに近かったのではないかと思われる。

さて、芭蕉と路通は、いつ敦賀を発ったであろうか。敦賀での大よその日程を終えている芭蕉にとって、路通と一緒に敦賀で便々として日を過ごす必然性はなく、如行宛書簡の内容から見ても、もう琵琶湖周辺か美濃にと予定していた日時であってみれば、その日のうちというのには性急すぎるとしても、八月十八日には敦賀を発ったであろう。とすれば、帰心矢のごとしで寄り道をするはずもなく、またその形跡もないところから、「駒にたすけられて」ポクポクと道中したとしても、丸二日もしくは二日半で「大垣の庄に入」っていると思われる。十九日の夜か廿日の昼頃には着いているのである。このあたり、類推に類推を重ねているから、一日か二日、あるいは二三日の誤差は当然あり得るけれども、廿日に大垣に着いて、その翌廿一日に特意満面の路通が「荊口句帖」に残された序を草したとした方が、一層常識的な理解の仕方ではなからうか。

敦賀から大垣への道程、大よそ私どもがてくてく行脚した道、もちろんのこと最終コースの関ヶ原と大垣の間は、垂井の追分から美濃路を辿ったのであり、大勢の俳友・弟子たちの顔を思い浮かべながら道を急ぐ芭蕉が、赤坂を迂回するはずもないのである。まして、

朝長の墓はともあれ、金生山頂の虚空蔵を参詣する心の余裕はないとするのが自然であろう。大垣庄の如行宅に一まず旅装を解いた芭蕉は、旅の疲れを癒やすとともに、「前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶら」うに囲まれて歌仙を興行し（「野あらしにの巻」に荊口・如行・左柳・残香・斜嶺・怒風が一座しながら、曾良や越人が名を見せないのは、彼らがまだ大垣に来ていなかった時に始められたと理解すればよい。越人は「予（曾良）ニ先達而」着いているけれど、曾良は九月三日「及夕、大垣ニ着」いているのであるから。また、左柳・路通・文鳥・越人・如行・荊口・此筋・木因・残香・曾良・斜嶺の一座した「はやく咲けの巻」の歌仙も残されており、芭蕉を囲む歌仙興行は他にもあった可能性があるのである。）、八月廿八日には赤坂の虚空蔵にも参詣し、淋しさとともに人の心をやわらかく包み込むような鳩の声に旅の疲れをいやし、同日のことかどうかは別として、青墓にある源朝長の墓にも詣でたのであろう。義経びいきの芭蕉にとって、義経の兄に当る薄幸の貴公子（「平治物語」に「朝長生年十六歳、雲の上のまじはりにて、器量ことがらゆふにやさしくおはしけれ」という。）朝長の墓は、哀感のこもった詩心を抱かせるものであったに違いないのである。いずれにせよ、八月廿一日から九月三日まで、曾良が大垣に再び出て来るまでの十二日の日数は、長途の旅に疲れ果てている芭蕉にとって、決して長い休養期間と言えるものではなかったと思われるのである。「蘇生」したものに会うがごとくにして「且悦び且いたはる」朋友・弟子に囲まれて歓迎される芭蕉にとって、この期間はむしろ短いと感じられたかも知れなかった。「旅の物うさいまだやまざるに」と『おくのほそ道』に記しているのである。

八月十五日から大智院で養生していた曾良は、九月二日に行動を起し、九月三日に大垣へ着いている。久しぶりに芭蕉にお目にかかるというよりも、芭蕉が伊勢神宮の遷宮の様子を拝観したいと願っていることを知っている曾良が、それに同行するために時期を見はからって出て来たのでもあったろう。三日の日記に「昨夜、木因二會」とあるのは、その夜は木因宅に宿したことを示すのである。うか。とすれば、芭蕉もこの頃木因宅に移っていたかも知れない。伊勢への出立には、舟問屋の木因宅が便であるからである。伊勢へのお供として出て来た曾良であるが、俳友との付き合いもあつてすぐ出立とはいかず、翌四日の日記には「源兵へ、會ニテ行」とある。源兵へ即ち浅井左柳宅で歌仙を巻いたことを示しており、恐らく「はやく咲けの巻」がそれであつたらう。五日も何かとあつて、六日の日記には「辰尅出船。木因、馳走。越人、船場迄送ル。如行、今一人、三リ送ル。餞別有。申ノ上尅、杉江へ着。云々」と記している。大垣の朋友・弟子たちの惜別の情がその行間に充分うかがえる記録である。

「弥生も末の七日」（陽曆五月十六日）に江戸を発つて「長月六日」（陽曆十月十八日）伊勢に向うまで、日数で言えば百五十日あまり、旅程で言えば六百余里の長途の旅も、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

の句を最後に終るのである。この句が、言われるごとく西行の歌「今ぞ知る二見浦の蛤の貝合とおほふなりけり」（『山家集』）を念頭に置いたものとすれば、芭蕉は最後まで古人に憑かれて、この困難な旅を終えたことになるのである。

○金崎城の古戦場（既述の『太平記』のそれ以外に、織田信長の

最初の朝倉攻めもここが主戦場となっている。浅井の離反によって急遽撤兵した時、木下藤吉郎が捨身の殿を務めたことでも著名な古戦場なのであるが、芭蕉がこの近世初頭の戦いに興を示した証はない。から、刀根坂・賤ヶ岳・小谷・姉川・関ヶ原という具合に、芭蕉が『おくのほそ道』の最後の旅程である敦賀と大垣の間で大なり小なり見聞したであろう近世初頭の古戦場について、その戦いの有様を私なりに下手な解説を付してきた。それだけの場が、それぞれの場なりに一種の感慨を抱かせたからである。

芭蕉も、古戦場には詩心をそそられたであろうことは、『おくのほそ道』の旅に限定しても、平泉での絶唱、

夏草や兵どもが夢の跡

でも充分証されるであらう。更にいえば、古戦場とは言えないが、越前小松の多田八幡では、実盛の甲と伝えるのを拝して、むざんやな甲の下のきりぐす

の句を残す。『おくのほそ道』には摘録されていないが、燧山の古城址では、

義仲の寢覺の山か月悲し

という悲傷の句を残す、芭蕉の古戦場に対する感懐がうかがえるのである。しかし、燧山の古城址は、信長の朝倉攻めの激戦地の一つでもあつたのであるが、芭蕉はその点には一向関心を示していない。芭蕉の念頭には、悲劇的生涯を終えた旭将軍義仲のことのみが浮んでいるのである。金崎古城址における態度と同じと言えようか。

大垣に帰り着いた芭蕉は、源朝長の墓に詣でている。そこで

『芭蕉俳句集』(岩波文庫本)の九五五の句を詠んでいるが、その脚注に「朝長の墓(青墓)美濃を芭蕉が秋通ったのは貞享元年と元禄二年、そのいずれかであろう。」とある。『甲子吟行』の旅で、常盤の塚に「義朝の心に似たり秋の風」の句を手向けて、さらに青墓で朝長の墓に詣でるといふのも連関して可と考えられるが、今は一応『おくのほそ道』の旅の終局時に詠んだとしておく。源朝長の事蹟は『平治物語』に詳細である。平治の乱で源氏勢汰への場に「次男中宮太夫進朝長十六歳、朽葉の直垂にをもだか」と云鑑をきる。又根はなしをもたかおとしなる星白の甲の緒をしめ、薄緑といふ太刀を帯、白篋に白鳥の羽にてはぎたる矢尻、笛藤の弓持て、葦毛なる馬に白覆輪の鞍をかせ、兄の義平の馬に同かしらに引たてさす。「と優美な若武者ぶりで描写される朝長であるが、合戦の修羅場では兄悪源太義平や弟右兵衛佐頼朝ほどの活躍をしていない。とはいえ、六波羅合戦に敗れた義朝たちが東国に落ちのびる途次、龍下越で横河法師に襲われた時「又矢一中宮の太夫の進朝長の弓手のもゝにしたゝかにたつ。義朝み給、「朝長は矢にあたりつる」と宣へば、矢を引かなぐりてなげすて、「陸奥六郎殿こそ矢にあたりて馬よりおちられ候つれ。朝長は矢にもあたり候はず」とて、すこしも臆する気色もおはせず、前をかけてぞすゝまれける。「と武人の子弟としての片鱗を示している。やがて「一所におちられける人々には、左馬頭義朝・嫡子鎌倉悪源太義平・二男中宮太夫進朝長・三男兵衛佐頼朝・佐渡式部太夫重成・平賀四郎義宣・義朝の乳母子鎌田兵衛正清・金丸をはじめとして、八騎の勢にておちられけり。」となった一行は、鎌倉街道の宿場青墓の「宿の長者大炊」を頼る。ここで

義朝は「悪源太と大夫進とめして、「一所にてはあしかるべし。義平は北国へくだり、越前国よりはじめて北国の勢そろへてのぼるべし。朝長は信濃へくだり、甲斐・信濃の源氏どもをもよほしてのぼるべし。義朝は東国にくんだり、兵相具してのぼらんずぞ。云々」と命ずるが、「朝長おちられけれ共、龍下にての疵、伊吹のすそ野の雪はこがれたり、きずいとゞおこりて大事になりしかば、かへり参り給。「この朝長の不覚を怒った義朝は「汝をたすけ置たらば、敵のかたへとははれ、うき名をながさんずらん」と手に掛けようとすが、「朝長生年十六歳、雲の上のまじはりにて、器量・ことがらゆふにやさしくおはしければ、刀のたてどもおぼえずして、涙をながすのである。延寿たち遊君の仲介で一旦思い止まった義朝は、「遊君ども酒すゝめたてまつりてかへりしかば、頭殿、「いかに、朝長は。」と宣へば、「存知候。」とて、合掌して念佛を申されければ、障子をあげていり給ひ、むなもとを三刀さしてくびをかき、むくろにさしつぎ、きぬ引かけていで給ふ。「義朝が青墓の宿を出た後、「夜もあければ、大炊障子をあげて入、「いかに今まで御やどりさぶらふぞや。」とて、きぬ引のけてみたてまつればむなしくなり給ありさまなり。みつぎまいらせよと宣ひつるは(義朝の言い置きに「朝長をすてをきて下候ぞ。しばらくみつげよ。」とあった)、御孝養を申せとおぼしけるにこそとて、涙をながし、死骸をばうしろなる竹のきはにて空しき烟となしたてまつり、御菩提事なくとぶらひたてまつりけり。「というのである。若武者の凜々しさには少し欠けるけれども、優にやさしい公達が従容として死につく有様は、人の涙をさそわずにはいないのである。その朝長の墓で、

芭蕉の念佛哉

の句を詠んだ芭蕉の想念は、平泉での「夏草や」の絶唱を生んだと同一線上にあったとしてよいであろう。しかも、朝長の墓への道すがら必ず見聞したに違いないお勝山については、一向に興を示していないのである。

ここまで説けば、芭蕉における古戦場の概念には、源平合戦時代からせいぜい『太平記』時代までのものしか含まれていず、戦国末期の合戦は全く含まれていないことが判るであろう。保元・平治から平家を経て太平記に至る軍記物語によって、文学的古典として美化された合戦の在り様は、芭蕉の念頭に優美にして勇壮な合戦絵巻を描かしているのであり、中でも不運にして敗れ去った武人たちの最後には、芭蕉とて一掬の涙を禁じ得なかったのである。更に言えば、そこでこそ芭蕉の詩心がより豊かに醸成されたとしてよいであろう。

それに反して、戦国末期における無数と言ってよい血みどろな合戦は、古典としての文学化がいまだ達成されていなかっただけでなく、芭蕉にとってもっと身近なものであり、平和を愛する詩人としては、むしろ目をそむけたいものでさえあったのではあるまいか。千軍万馬、数多くの修羅場を馳駆して、浅井長政に仕えた一介の武人から伊賀・伊勢三十二万石を領する大名にまで申し上がった藤堂高虎、その藤堂家の支城たる伊賀上野での下級武士出自の芭蕉であってみれば、伊賀の郷士の末裔とは言え、身近な人々―例えば曾祖父とか祖父の世代の人々の中には、名もなき争乱の中で戦場の露と消えた無名の戦士が居たかも知れなかった。信長の、秀吉の、家康の古戦場は、古戦場というよりも、生々し

い血の匂いを直接肌に感じさせるものであったかも知れないのである。当然、そこでは、詩的に昇華された古き美を慕う芭蕉にとって、詩心をはぐくむ機縁を求めることは不可能であったとも言えるであろう。私どもが、それはそれなりに、ある種の詩情を感じ得た戦国末期の古戦場に対して、芭蕉が一顧だに与えていないというのは、芭蕉にとって必然的在り様であったのではあるまいか。そして、そうしたところに、ともすれば古きをのみ求める芭蕉の詩心の限界を指摘することも、あなたがち無稽のこととのみは言えないであろう。

今はただ、敦賀から大垣までの旅程で見聞した古戦場に対して、芭蕉が一片のコメントも残してくれなかったらしいことに関して、私なりの疑念を記したままである。(昭和五十三年六月稿了)

(本学国文学科教授)